

---

# 四季恋草紙

斉賀むつみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四季恋草紙

### 【Nコード】

N9546R

### 【作者名】

斉賀むつみ

### 【あらすじ】

時は平安の世。権中納言家の次女、小夜は正室や義理の姉に疎まれ蔑まれながらも気丈に暮らしていた。桜舞うある夜、小夜のもとを訪れた人物がいた。都で噂されていたこの人物を、小夜は「人違いだ」と追いつ返してしまう。だがこの日を機に、小夜を取り巻く環境がみるみる変わっていく。

## 春の巻 壱

誰にも御名はお教えくださらないのですね、そうこの間の女官は言った。寂しげに笑って。

せめてお名前の手がかりだけでも、と後朝きみぎめの去り際に衣の裾にすがったのはどこかの姫君。

ことの最中に名を呼んで欲しいと請われ、彼女たちの名を聞いたはずなのだが全く思い出せない。そもそも、端から覚える気などなかったのだらう。一度訪れた女の元へと、自分が再び通うことはないのだから。

「だから楽しいんじゃないか」

手折った桜の枝をもてあそびながら、高欄たからんに腰掛けた青年はぽつりと呟いた。聞き捨てならぬことを、と苛立たしげにぼやいたのは近くの柱に寄りかかり立つ別の青年。

「『近ごろ時めく御方』とやらは衣はおるか、後朝の歌さえも交わしてくれぬともっぱらの噂だらうが。そんな非道い男に娘の元へ通われてはたまらんと、あちこちの家が警備を厳しくしているんだぞ」

「……それで？」

「だから俺が通う場所がなくなるじゃないか!!」

竹馬の友の言い分に、彼 実朝さねのりは呆れた様子で溜め息をついた。

「それなのに姫君たちの間ではそいつの評判はとどまることを知らない。俺が面白いわけがないだらう」

公昭の苛立ちはおさまらず、男らしく精悍な顔立ちが負けず嫌いやえに歪む。

ひところ前までの「都でもっともステキと噂される公達」であった公昭きみあきにとってみれば、確かに面白い事態では決してないだらう。

時は平安の世、風雅をなによりも重んじる貴族たちにとっては、恋愛もまた優雅でなければならぬもの。様々な伝手をたどって姫君と文を交わし、許しが得られれば夜に忍んで行って愛を交わす。後朝といって、この後の朝には日が昇るよりも先に男は退出し、別れを惜しむ和歌を交わすのがこの頃の恋愛の典型。香を焚きしめた衣を取り交わすこともしばしばだ。公昭はそんな恋愛を得手としていたが 一方の実朔は常識破りと言っても過言ではなかった。いわく、先に交わす文はただ一通。それも「今夜貴女の元へと忍んで参りますゆえ、戸の掛け金は外しておいてください」という意味合いの和歌。夜陰に紛れてであるために手引きをした女房たちにも顔は知れず、手がかりは浅くかすれた若い男の声のみ。それはそれで扇情的かもしれないが、この後には和歌も衣も次の約束も交わすことなく、まるで女を捨てるかのように出て行く。そのために夜毎枕を濡らした女性がどれほどいるかとまことしやかに噂は告げる。

悪かったよ、とつぶやいて実朔は肩をすくめた。俺たちの評判なんてすぐに逆転するさ、とうそぶく。

「どうせ俺は、名前なんて告げた日には一生の独り寝が決まるんだから。『朔宮』<sup>つひのみや</sup>だなんて、難儀な名前をつけたものだよ、父上も」

自嘲気味に呟いた。

朔宮、その名は帝の長男皇子であることを示す。長子といえど、実朔の地位は高くない。というのは、彼の母方はあまり権力を持たないからだ。

父の跡を継ぐこと、良い官位や良縁を得ること、これらには母方の祖父の地位と権力がものを言う時代だ。祖父亡き実朔にとって、東宮（次の帝）になることなど不可能。貧乏貴族への道を歩むか、早々に姓をもらい臣下に下るか、どちらかが関の山だ。

太政大臣の娘である藤壺中宮が生んだ咲宮<sup>はなのみや</sup>が、いずれは東宮にと

指名されることだろう。帝のご意志は明かされていないが、誰もがそう確信している。

別に、東宮の地位など惜しくはない。五つ年下の咲宮は自分を兄と慕ってくれていて、だから彼が次の帝になればいいと実朔は思う。それでも いったって、宙ぶらりんの立場に居心地は悪かった。幼い頃ならば公昭と他愛もない悪戯をして晴れた心も、近頃では余計に曇ってゆくばかり。

「だからって、なあ！」

そんなことを言うな、と言いたげに憤りを隠せない公昭。彼をよそに、実朔は高欄を飛び降りた。白い狩衣かりぎぬの裾がふわりと揺れる。帰るよ、と短くそれだけを伝えて彼は家路についた。今日もまた、眠らない夜を過ごすことだろう。それまで、さして深くもない眠りを貪るために。

月の明き夜だった。夜風になぶられて薄紅色の花びらが中を舞う。桜朧月。こうしてその夜の相手の元へと忍んでいくとき、実朔は自分が夢魔にでもなったような心持ちを覚える。夜毎違う相手をゆめうつつに惑わし、朝になれば実態などなかったように消えていく。

それでいい、と思う。朔宮のこの名は、長子であるということ以外に深い意味はないだろう。それなのに、まだ足りない、物足りないといと心のどこかで声がする。十四日をかけて満ちていく月の「はじめ」、欠けたままの月の名による呪いでもあるのだろうか。

そんなつまらない思考を風がさらっていくころ、実朔は目的の屋敷に着いた。

風雅な屋敷、そこかしこに心配りがゆきとどいていて  ただ、

それだけ構造は複雑だ。人の気配に居眠りから目覚めた衛士えしから見  
つかりそうになって、慌てて近くの御簾から部屋の中へと滑り込ん  
だ。

ほっと息をついたのもつかの間、「だれ」と小さく呼ばわる凜と  
した声に飛び上がることになる。

「だれなの」

声は小さく、けれど侵入者の存在を確信して発せられた。若い女  
性の、高すぎも低すぎもせず、清廉な印象を与える声。

「……夕に文で先触れをした者ですよ」

実朔はいつもこう告げるようにしている。飛ぶように噂の回る都  
では、これが『名乗らない謎の公達』である合図だと皆がもう知っ  
ているからだ。そしてこう告げれば相手は闇の中で頬を赤らめ、温  
もりが寄り添うのを待ちわびるのだと実朔も知っているから。

しかし彼女は他の女と違い、さっと床を出て立ち上がり、まっす  
ぐに実朔を見据えた。黒目がちの瞳に、満ちた月が映し出される。  
それを見つめ返す自分の瞳にも、この満ちた月が反射して映って  
いるのだろうか、呆然と実朔は考えた。尋ねたら、答えてくれる  
のだろうか。この姫君は。ひとすじ芯の通った、張りのある美しい  
声で。

「文？ 先触れ？ 姉様なら、その御簾を出て二つ先の奥にい  
るわ」

呆れた様子もなく、若い男の声に怯えることもなく、淡々と声は  
告げた。その声に、ぼんやりと考えていた実朔は我を取り戻す。

どうやら目的の女性の妹の部屋へと入ってしまったらしい。けれ  
ど彼にとってはそんなことはもうどうだってよくて。

「 貴女は」

思えば、女性に名を尋ねたことなどこれが最初だったように思う。  
先に名乗らねば失礼にあたることなど忘れて。

「私？ 私は小夜。姉様や北の方（正室）はときどき十六夜こむぎと呼

ぶけれど」

彼女は、そう言って少しだけ笑った。表情が動いて、人形のような風貌に命が宿ったように見える。

大納言と身分の低い女の間に来た娘。邪魔な存在を憎むあまりにつけられた「ためらい」という蔑称が、これほど愛しいと思えたのは初めてだった。

「それで、あなたはだれ？」

「私は …… 貴女と居ること望月を希める者です」

ついたちの月と、十六夜の月。逢わせればそれはそれは綺麗な望月ができあがる。きつと安らいだ、満ち足りた日々を送れることだろうと、御簾を掲げた月明かりの下、実朔はそっと笑った。

## 春の巻 貳

目が覚めたら、いつもの朝だった。

昨夜のできごとは夢だった、とさえ考えてしまった。

権中納言家の大君（\*1）のもとへ、文がやってきたのは昨日のこと。

この文に、北の方（\*2）も大君も揃って喜び、紅を衣装をと準備に奔走し、上を下への大騒ぎをした。

大君に文を送ったのは、都で噂の「名乗らずの公達」だったから。

贈るのは和歌一つのみ。娘たちを惑わし、名乗りもせず、次の約束もせずに去る。

そんな名乗らずの公達の素行を、けしからん、と眉をひそめて否定する者たちがいる。

一方で、破天荒ではあるけれど魅力的だ、と胸を躍らせ肯定する者たちもいる。このような思い切った遊びができるのは、やんごとなき身分の公達ではないだろうか。そんな予想が、じわじわと都に広まってきた折であった。

貴族たちにとっては、より高貴な身分の家柄と縁続きになる、格好のチャンスである。場合によっては、娘の良縁だけでなく、その父の出世に繋がることも考えられた。

誰か、名乗らずの公達を振り向かせる娘はいないものか。

そんな、恋の鞘当てに喜んで参加する姉をよそに、小夜はいつもと変わらない生活を送っていた。

もともと、妾腹の小夜は北の方にも大君にも疎んじられていた。

何かにつけ嘲笑されることの方が多いい中、彼女たちの興味が自分から他へ向くのは歓迎すべきことだった。

「扱いに困る、ためらう。だから、十六夜」

よく大君が言う台詞を、小夜はひとり真似て笑った。

恋にも良縁にもチャンスはまるでなく、興味もわかかなかった。政略のために適当な家へと嫁がされるか、肩身の狭い独身を貫いて、北の方や大君に蔑まれ続けるのか。

先はわからないが、どのみち、たいした未来など有りはしなかった。それ以外の道を知らず、また模索する気が起こらなかった。

ためらっているのは、北の方や大君ではなく、小夜自身の間違いだろう。

夜半に物音がして、小夜は目覚めた。御簾が微かに揺れている。

誰かが、いる。

「だれ」

はじめは、物取りか何かだと思った。だからつい、誰何の音が鋭くなった。

自分で自分に呆れる。小夜の持ち物など大君のお下がりばかりで、その多くが季節外れや流行遅れだ。調度のものもろくに揃っておらず、金目のものなどあるはずもないのに。

「だれなの」

ここには金目のものなどない、と言う前に、返答があった。

「……夕に文で先触れをした者ですよ」

浅くかすれた、若い男の声。いい声をしている。口上から、「名乗らずの公達」だとわかった。小夜ではなく、姉の大君を望んだはずの公達だと。

馬鹿にしている、と思った。

大君か北の方にも、頼まれたのだろうか。間違えて小夜の部屋へ入ったふりをしてほしい、と。見当はずれの恋に期待して舞い上がった顔と、期待が外れて落胆した顔が見たいのだ、と。

誰のものにもならないからこそ、この公達には好感が持てると思っていた。まさか、こんなに薄っぺらな男だとは思わなかった。底意地が悪いだけの姉や母の、蔑みときつい悪戯に付き合うような。

(顔を、見てやろうじゃないの)

家族以外の男性には顔を見せないのが、貴族女性においては一般的。男女のことには、互いの表情さえ見えないほどの、漆黒の闇が好まれた時代だ。

多くの女性がこれまで彼の訪れを受けただろう。しかし、彼の顔を見た者はいなかったはず。

てらいもなく、「名乗らずの公達」の隣に立つ。御簾を軽く傾けると、月の光が明るく射しこんで、二人を照らした。そういえば今日は満月だった。

相手の顔を眺めれば自分の顔も見られる、ということ忘れて小夜は彼の顔に見入った。

鼻梁の通った、整った顔立ちをしていた。少年のように涼しげな目元が、今は驚きに見開かれていた。

「文？ 先触れ？ 姉様なら、その御簾を出て二つ先の奥にいるわ」

強い視線を保ったまま、小夜は告げた。

馬鹿らしい勘違いなどしない。姉たちの悪戯に、みすみす捕われはしない。

「貴女は」

まだ、茶番を続けようというのか。それにしては表情が驚きのままだ。

「私？ 私は小夜。姉様や北の方はときどき十六夜と呼ぶけれど」  
母と言わず、北の方と呼ぶ。これで、自分が身分の低い妾腹だと

通じるだろう。十六夜、「ためらい」という蔑称で呼ばれることまで付け加えた。

自分で自分を卑下することは、好きではない。けれど、意地の悪い罫に嵌るのはもつと嫌だ。だからこれは、「私を相手にしても仕様がない」というメツセージ。駄目だしに、わざわざ名を訊いてみようか。「名乗らずの公達」に。

「それで、あなたはだれ？」  
笑って、訊ねた。

不思議なことに、彼の顔が驚きからすると和らいで、優しい笑顔へと転じた。恋多く浮名を流したとは思えないほど、無邪気な笑顔だった。あまりの変化に、今度は小夜が驚くしかない。

「私は …… 貴女と居ることで望月を希める者です」  
あろうことが、誰かに返事さえあった。謎かけのような返事だけれど、よく考えたら手がかりにはなりそうなほどの。

毒を抜かれた、とはこのことだろうか。優しい笑顔に、意地の悪さは感じられなくて。

どうやら、姉たちの悪戯に付き合わされたのではなく、本当に部屋を間違えたらしかった。

「良いのですか？ 私に、名乗ってしまっても」  
「構いませんよ。貴女は、口が堅そうだ」

牽制とも取れる一言に、ちゃっかりしている、と小夜はうなる。確かに、誰にも言う気はしなかった。「名乗らずの公達」の秘密を自分だけが知っている、それはとても心躍ることのように思えた。

その後、彼は静かに帰っていった。交わしたのは、四半時ほどの会話だけ。

それでいい、と小夜は思う。彼に惑わされた娘たちの中に、名を連ねる気はなかった。

そしていつもと変わらぬ朝が来た。父は朝早くに出仕し、北の方と大君は相も変わらず些細なことで小夜を嘲笑する。

名乗らずの公達に約束をすっぱかされた割に、二人の態度は普段と変わりなかった。矜持が高いから、「現れなかった」とはとても言えないのだろう。

ひとつめの変化が訪れたのは、早くに父が帰宅した、昼下がりのこと。小夜が呼び出され、珍しいこともあるものだ…と出向くと、父は興奮気味に言った。

「小夜、内裏たいりで暮らす気はないか？」

いつか、この家を出ると言われるのではないかと思っていた。北の方は小夜を邪魔者扱いしており、目の前の父は恐妻家。北の方がごねて、ついに折れたのだろうか。未婚の娘を放り出すとあっては体面が悪いから、なにか良い言い訳ができたのだろうか。だいたい、どこに放り出されるといのか。内裏。……内裏？！

「は？」

内裏とは、天皇の住まう宮城、内親王や女王、中宮、女御などが暮らす後宮、政務を行う官庁、これら全ての総称である。女性が暮らせるエリアというのは、後宮をおいて他にない。しかし、権中納言家の妾腹ともなれば、天皇や東宮、親王に嫁ぐというのは身分から考えて難しい。

「とても良いお話なんだ。太政大臣が、華宮はなのみやさまに年頃の近い女官をお探しでね。お前をぜひにとおっしゃる。どうだ、お仕えしてみるのはないか？」

華宮は、今上おかみと藤壺中宮との間に生まれた、ただひとりの姫宮だ。藤壺中宮の父であり、華宮にとっては祖父にあたる太政大臣は、都で絶大な権勢を誇っている。これまで小夜の父は太政大臣派の末席には居たものの、それほど篤く取り立てられることもなく。それが

どうして、いきなり自分が女官として出仕することになるのだろうか？

昨夜の出来事がたとえ夢であったとしても、どうやらこちらには夢というわけではなさそうだった。

## 春の巻 式（後書き）

\*1） 長女のことを大君、次女のことを中君と呼ぶ風習が当時ありました。

\*2） 北の方、とは正妻のこと。貴族の屋敷では、北に正室の住まう建物があったことから。

ささやかながら、補足でした。

## 春の巻 参

「ねえ、……………じゃない？」

「いやだ、……………ですもの」

ひそひそと笑いさざめく声が聞こえる。小声なのに、その音がしっかりと聞こえてきてしまうのは、いったいどういう訳なのだろう。

「これだから、……………」

「……………をまるで知らないのね」

声たちは御簾の奥からやってくる。途切れ途切れにしか聞こえないけれど、内容など高が知れていた。

自分を指して、蔑んで笑っている。御簾と扇で隠した顔はきつと笑いにゆがんで、塗り固めた白粉にひびでも入っているに違いない。さぞ醜い笑顔であることだろう。

どこにでも、こういう人たちはいるものなのだ。継母と異母姉を思い出して、小夜はこっそりため息をついた。

紫式部。清少納言。和泉式部。

いずれも、女流文学を花開かせたことで名高い者たちだ。彼女らは「女房」と呼ばれ、中宮など天皇のきさき、あるいは内親王など、高貴な身分の者に仕えた。内裏に仕える女官のうちでは高い位置におり、その多くは教養や舞楽に優れ、家庭教師や秘書のような役割を果たすのだ。

「どうして、私がそんな……………」

今上帝の内親王、華宮はなのみやに女房として仕える気はないかと父が尋ねたのは先日のこと。

けれどこれまでにそんな話が出たことも無く、そもそも縁もゆかりも無く。

小夜にはただ、なぜ、という他に言葉がなかった。

「以前、太政大臣のお邸に招かれて琴を披露したことがあるだろう。あれが宮さまのお耳に留まってね、大臣を通してお話があったんだ」

確かに、箏の琴は好きだし、得意ではあった。太政大臣邸に家族そろって招かれ、琴を披露したことも覚えがある。

華宮は太政大臣の孫娘にあたる。彼から話を受けるならば、小夜も父も内裏において強力な後ろ盾を得ることができる。それだけに父は大層乗り気であった。日頃寡黙な彼には珍しく、興奮気味に話を続ける。

「どうだろう？華宮さまは年ごろの近い女房をお探しでいらつしやる。箏の琴をお教えするのは表向きで、実際の役目は話し相手になってさしあげることだ。行ってみる気はないか？」

華宮は小夜のひとつ年下だという。

やんごとなき方から申し出があったとして、大きな理由が無い限り小夜や父が断れるはずもない。

かくして、桜散らす雨のころ。小夜は内裏へ、華宮に仕える者として参じた。

(面倒だなあ……)

華宮に挨拶を済ませたのが最初。続いて、華宮の生母である中宮に挨拶を…と案内を受けている最中だった。

廊下を進んでいると、隣接する部屋から嘲笑が聞こえる。

「いくら宮さまからお話を頂いたといえど、宮中へ参じるなんておこがましい」だの、「身分不相応なのだから断るのが礼儀だろう」だの、そんなことを言われているのだろう。

小夜の生活は今までこんな嘲笑ばかりだったから、慣れていない

わけではない。

でも、傷つかないと言ったら嘘になる。

華やかで、憧れの的であった宮中も、所詮はこんなものか。ずっと過ごしていたあの狭い部屋と、何も変わるところはないのか。

新しい世界に足を踏み入れて、わくわくしていたはずの気持ちが、すうつとしぼんで消えそうになった。

新しい世界に来たといっても。大して未来がないことは、変わらないのではないのか？

立ちすくんだ足を奮い立たせて、先に歩いていった案内を追いかけようとする。

その方向から、戻ってきた者がいた。

「ごめんなさいね。乳母の上総かすねは足が速くて。初めてだと、迷ってしまっわよね」

母君と仲がいいから、早く会いたくてたまらないみたいなの。そう言っつて、華宮はころころと笑った。

「あ……いえ。お手間を取らせてしまって」

上総ではなく、華宮その人が迎えに来るなんて。小夜はひどく恐縮してしまった。

華宮は小夜の恐縮ぶりを見て、続いて御簾の方へと目をやった。

笑いさざめく声はまだかすかに聞こえている。しばし沈黙して、華宮は言った。

「……いいの？」

「慣れておりますから」

「でも」

気遣わしげな視線を向けられて、小夜は少し感動してしまった。これまで陰口を叩かれる一方で、優しくされたことなど皆無に等しかったからだ。

心配されたことになんとか感謝を伝えたくて、大丈夫だと言いたくて。焦っていたら、つい本音がこぼれた。

「私には心はありますから、嫌でないわけはありません。けれど、心無い方に嫌と言ったところで、心が無ければおわかり頂ける道理がありませんでしょう」

御簾の奥の声がぴたりとやんだ。

そこではたと気づく。御簾の奥の方々がどれほど上の人々か知らないのに、こんなことを口走ってはまずかったのでは。

小夜が不安になり始めた頃、朗らかな笑い声その場上がった。

「ほんとうね、その通りだわ！では、無駄な努力などせず母君のもとへ参りましょう」

「あ、はい」

助け舟を出してくれたのだ、と気づいたのは中宮の部屋にだいぶ近づいた頃。宮中でもまれに見るほどの、愚痴っぽくて意地の悪い間なのよ、と苦笑しながら華宮は教えてくれた。

「それをいちどきに黙らせるなんて、なかなかいいことを言うわね。胸がすつとしたわ」

ぼかんとする小夜を見て、もう一度華宮は笑った。

ああ、場所など関係ないのだと小夜は思った。

そこに素晴らしい人がいれば、それだけで暮らして楽しく良いものになるのだと、心から感じた。

少し未来を考えてみる、そんな気持ちになれる気がした。

約束を、した。数日前に逢った、名無しの公達と。

「きつと、また会うことがあります。次は昼間に現れますか

ら、顔をよく見せてください。そうしたら、またお話をしましょう」「  
良い話し相手ができそうよ、と中宮に伝える華宮を見て。優しい  
な笑みを向けてくれる中宮を見て。

あの人はどうしただろう、と考えた。公達であるならば、宮中に  
居れば容易く会えるはずなのだ。もしも彼が、華宮にお仕えする道  
を作ってくれた恩人であるならば。一目会って、礼を言わなければ。  
そんなことを、考えた。

## 春の巻 肆

はらはらとあっけなく散るくせに、思っていたよりもしぶといようだ。

満開の桜を見上げて、小夜はそんな感想を抱いた。

見上げるのは、内裏で丁寧に育てられた桜の木である。一昨夜の雨で散ってしまうのでは…と気をもんでいたが、どうやら杞憂だったらしい。まだ見事な様を見続けていられることにほっとしていると、背後からかけられる声があった。

「まだ見ていたの？桜なら、どこでも見ていられるでしょうに」

「宮さま」

上総を従えて居室に戻ってきた華宮の、声には呆れの色が強い。それでも表情は穏やかで、そのやわらかい目線は小夜に笑いかけると樹上に移された。

「年に一度の楽しみではないですか。咲いている間を見逃すのは勿体ない、と思ってしまうのです」

庇（\*1）に立ちすくんでずっと花を見上げ続けるのは自分でもどうかと思うけれど。

寒さを耐えてようやく咲くこの花が、小夜は好きだ。

桜とは不思議な花である。花といえば桜、と言われるようになって久しく、刻一刻と変化する咲き具合もそれぞれが楽しみにされる。蕾が綻んだころや満開の様はともかく、散るさまさえ美しいと評される花は他に類を見ない。冬を耐え抜けば必ず桜が咲く、その様に人々は、辛いことを耐え忍べばいつか報われる日が来るだろう、と希望を持つことができるのかもしれない。

(耐え忍んでみるものねえ)

耐え忍んだ日々を思い起こして、小夜は感嘆のため息をついた。内裏に入ってからというもの、小夜の日常は大きく変わった。激変した、と言っている。

つい数日前までは、屋敷のはずれの部屋にひとりであった。狭くて湿気のたまりやすい部屋に、ただひとり。母は小夜を産む際に命を落とし、小夜は乳母に育てられた。彼女は物心ついた頃亡くなり、以来小夜は自分の身の回りのことは自分でこなすのが常だった。

それが今や、美しい衣を与えられ豊かな調度に囲まれて過ごしている。小夜をあるがまま受け入れてくれる人々がいる。

これ以上、望むことなんてあるんだろうか。

「そうは言うけれど。一年たったらまた桜も咲くわけですからね。そんなことを言い放ったのは上総だった。彼女は華宮に仕える女官のなかで最も年かさで、一時は乳母も務めたという。礼儀作法には厳しいが、言葉の裏には華宮に対する愛情が時折垣間見える。

「それはそうよ。咲いてくれなければ困るわ」

「同じように咲くのであれば、翌年の桜は今年の桜よりも良いものにしたらいかがです、と申し上げているんです」

小夜の傍らに並んで上総も桜を見上げた。

「一年経ったからといって、全く同じ年がめぐってくることはありません。一年後、どうありたいか考えてみるのも、いいとは思いますがね」

ぶっきらぼうな声音でそう嘯くと、上総は踵を返して御簾の奥へと行ってしまった。取り残された小夜と華宮は顔を見合わせるしかない。

心のうちを見抜かれたようで、小夜はただ絶句するばかりだった。

今の自分には、この先に望むものが何もない。これまではそれで良かったのかもしれないが、宮仕えを続けるためにはそうも行かないのかもしれない。

「……………びつくりしました」

「何が？」

「私の考えていることをすべて、見透かされてしまったようで。

……………私、そんなにわかりやすいのでしょうか」

厳密には、何も考えられないことを見抜かれた、というべきかもしれない。まだ小夜が内裏に来て三日。その短期間に思考を見抜かれるほど心情がわかりやすいのだとしたら、実家で義母や父に対して虚勢を張っていたことが急激に恥ずかしくなってくる。

「そんなことは、ないと思うけれど……………少なくとも、上総は千里眼を持つてると思うわよ」

「千里眼、ですか」

「そうよ。作法を少しでも手抜きしただけで飛んでくるんだもの。背中にも目がついているのかしら、つとどき疑わしくなるわね」  
それは実におそろしい。宮仕えにあたって自分の作法に自信の無い小夜は震え上がる。

「それって、この前の意地悪な方々よりずっと恐ろしい……………ってことになりますよね」

「ええ、もちろんよ。この宮中で上総に敵う者はいないわ」

大真面目な顔で頷きあう。が、数秒も経たぬうちに二人して吹き出してしまった。

「さては、宮さま何度もこてんぱんにされましたね？」

「そうなの。聞いてくれる？怒ったときの上総、ほんとうに容赦がないのよ」

言葉がきつくて、心の底から落ち込むんだから。文句も言いながらも、華宮の表情は笑ったままだ。

「けれど、味方であればこの上なく心強いでしょうね」  
「そうね。そう思うわ」

一年後のことなんか、想像できるはずがない。でも望むことが自由だと言っつのなら、

こんなふうに華宮と笑い合っつていられたらいい、と小夜は思う。

## 春の巻 肆（後書き）

（\*1） 御簾や戸の内側が室内、外側が屋外にあたります。平安時代の建造物は廊下や通路が屋外にあり、頭上には屋根の端がありました。この空間を指すものとして庇ということばをここでは使っています。

## 春の巻 伍

興ざめなもの。

花びらが散ってしまった桜。季節は終わったのに、手元に残ってしまった桜色の和紙。

桜が散ってしまうと、途端に物憂い気分になってしまふのはなぜだろう。文机にもたれて、小夜はため息をついた。

ため息をつく間もなく、いつも楽しそうに話しかけてくれるはずの華宮は、今日は不在であった。

年頃も近く、瞬く間に仲良くなった華宮は、まるで乳兄弟のように親しげに小夜に接してくれる。継母や異母姉にいびられ暮らした頃とは天地の差があり、幸せで寂しさなど感じなかった。

そう、話し相手を求めていたのは華宮だけでなく、小夜も然りだったのだ。きつと。だから物慣れぬ宮中で暇をもてあますのは、どうにも居心地が悪くて。

こうしてひとりで居ることは、ひどく興ざめ　　がっかりすることなのだ、と改めて小夜には思われた。

桜の新芽を育てるような、すがすがしい日ざしが射しこんでくる。良い天気だ。

このままずっとと、まどろんでしまいたい……そう考えていると、そよ風が文机の上の紙をひらりとさらっていった。上質な和紙はかざりと音を立てて床に落ちる。

ああ、憂鬱だ。小夜にため息をつかせるものが、まだあった。

興ざめなもの。

興味本位で送られてくる、恋文。

文から相手が恋に手馴れていることを感じられれば、なおいっそ

う興ざめである。

名前も覚束ない相手から送られてきたって、小夜には返事の仕様が無い。様々な人と恋を交わして噂されて、その何がいいの、と思ってしまう。まして、「物珍しいから短歌を送ってみた」という雰囲気の見え透いたものが届いた日には、返事をするのも馬鹿馬鹿しくなってくる。

面倒くさくなって、小夜はいつもの断り文句をしたためた。いわく、

「宮中に入ったばかりのわたくしに、恋文を下さる方がいらつしやるわけはありません。どなたか、相手をお間違えではないでしょうか」

そんな意味合いの返歌を書いて、下働きの童に託す。こんな文を書くのも、もう何度目か。最近とみに多くなって、もう忘れてしまった。わざわざ短歌を考えるのも面倒で、失礼とは思いつつも、同じ返答を使いまわしている。

「せっかくの恋文をなおざりにしてしまうなんて、少し、もったいない気がするわよ」

いつの夕暮れだったか。華宮の乳母の上総も、他にお仕える女性たちも、みな出払ってしまっていて。小夜と華宮ふたりだけのとき、ぼそりと華宮がこぼした。

「わたくしは一体、どこへ嫁がされるのかしら」

普段の華やかな笑顔は、なかった。内親王に勝る身分の殿方は、実の親や兄弟をおいて他に無い。華宮が降嫁することは疑いようも無く、ただ相手が決まっていなかった。

相手を決めるのは、政略と家柄のみ。そこに華宮の意志はない。

「それは……」

宮中に入って日の浅い小夜には答えられない。誰が身分上適して

いるのか。どう言えば華宮の不安を取り除くことができるのか。必死に考えていると、少し笑う声がした。

「いやだ、そんなに考え込んでくれたの？ありがとう」

怖いのだ、と華宮は言った。

降嫁したら、腫れ物の様に扱われはしないか。ただの飾りにされた拳句、世間知らずになって行きはしないか。

「……」

少しだけ、小夜には覚えがあった。

政情を知ろうとしない継母。自分や娘を飾ることにしか興味は無く、それなのに夫の出世が遅いとなじってみせる。気の弱い父は申し訳なさそうに笑っていた。その奥にどれほどの苦勞があったのか。宮中で暮らすようになって、殿上人たち（\*1）の出世争いを垣間見るようになって、少しずつ小夜にもわかるようになってきた。

「そのお心があれば、宮さまはそのようにはなりません……そう、思います」

自信がなくて、語尾を濁してしまったけれど。自分の考えをしっかりと持つ、華宮の長所が失われてしまうのは忍びない。願いをこめて、小夜はかみしめるように言った。

「そうだといいわね…そう、願うわ」

ただの貴族女性としての、普通の結婚は望めない可能性が高い。華宮も、小夜もそれは同じことで。そんな、乳母にも言えない悩みを、打ち明けられたことが誇らしかった。そう感じていた矢先、華宮は小夜に矛先を向けた。

「ところで、どうして小夜はあんなにも文を嫌がるの？誰か、心に留める人でもいるの？」

「珍しいことを理由に送られる文など、あっても鬱陶しいだけです。納言家の妾腹を本気で娶ろうとするような、酔狂な方などおりません。私の存在が珍しくなくなれば、きっと文も絶えましよう。それを待っているんです。私も世間知らずになるのは嫌ですから、

宮さまがお許しくださるなら、嫁がれた先でもお仕えしますよ？」

いつでもお呼びください、と小夜は笑った。

「仕方ないわね。嫌というほどこき使ってあげるわ」

華宮の表情にも笑顔が戻った。

風に舞い上がった紙が鼻先をくすぐって、小夜は目を覚ました。

文机にもたれて、うたたねをしていたらしい。不自然な姿勢だったせいか、こころなしか背中が痛い。

よほど、暇をもてあましていたのだろう……。そういえば、「次は、昼間に」と約束したはずの、名無しの公達は現れない。華宮が居ても構わないと思うが、こういうときに、他に誰もいない時に現れなくてどうするのだろう、などと八つ当たりめいたことを小夜は考えた。

(……あ、れ)

次の瞬間、はじかれたように起き上がる。

小夜が彼と邂逅を果たしたあの日以来、「名乗らずの公達」の噂はぱたりと消えていた。

## 春の巻 伍（後書き）

枕草子の第二十三段、「すさまじきもの」（現代語訳：興ざめなもの）からイメージを拝借しました。

（\*1）殿上人、とは帝のそば近くに侍ることを許された、一定以上の地位をもつ貴族のこと。

## 春の巻 陸

「相変わらず、ふてぶてしいお顔ですね。わたくしの心が繊細だと感じさせていただいて、いつもありがたく思いますわ」

「いえいえ、御礼をおっしゃって頂くにはおよびません。華宮さまは私めよりもずっと心意気がお強いと、兄宮さまからいつも伺っていますから」

奇妙な光景だなあ、と小夜は思った。

華宮と、少し年上の男がひとり。どちらにもこにここと微笑んで、表情とは異なる言葉を交わしている。

「…いつも、こうなのですか？」

小声で訊ねると、華宮の乳母・上総は苦笑した。

「ええ、幼少のみぎりより、お二方は毎度このような感じですよ。あまりに見慣れてしまつて、お止めするのも忘れて久しくなりました」

放っておけばやみますから、落ち着いてお待ちなさい。涼しい顔でそんなことを言う上総が、小夜にはとても頼もしく見えた。

目の前の男は、近衛府にて中將の任についている。住まいには「枝ぶりが都一美しい」と評判の橋があることから、彼は橋中將と呼ばれるようになった。藤壺の中宮（華宮の生母）や太政大臣とゆかりのある家柄で、華宮とは幼少時より付き合いがあったそうだった。ただし、犬猿の仲として。

上総や藤壺中宮に言わせれば、仲の良い喧嘩友達といったところなのだが、本人たちは頑として認めようとしない。否定する息がびつたりなのがどうにも可笑しい、と周囲はため息をもらすのが常だそうだった。

「して、そちらの方は？」

橋中將が小夜の方を向く。突然矛先を向けられ、小夜は慌ててい

ずまいを正した。

「権中納言が次女、小夜と申します。先日より華宮さまにお仕えさせていただいております」

「ああ、箏の琴が上手だと聞いていますよ。近いうちにぜひとも、琴の音を聞かせていただきたいものだと思っていました」

「いえ、そのような大したものでは…」

社交辞令に慣れない小夜は、賛辞をもらっても巧く返すことができない。ただ恐縮するしかない自分が、なんだか無様に感じてしまう。卑屈になつてはいけない、尚更情けなくなつてしまつ、と思うのだけだ。

そんな小夜の心を知つてか知らずか。人心掌握に長けた橘中將は、にこやかに微笑んで、小夜の心を軽くする言葉をくれる。

「まあ、そう言わずに。宴など開かれた折には、琴や笛などを合わせる機会もございましょう。その際にでも、聞かせて頂けることを楽しみにしていますよ」

合奏ならば、小夜の演奏は適度に紛れてしまう。それならたぶん大丈夫、と安堵する心があつた。

「ありがとうございます。橘中將さま」

流石は物慣れた人の心遣いだと、小夜は感謝を込めて頭を垂れた。この橘中將といい、日々お仕えしている華宮といい、引き合わされるひとは皆、氣立ての優れた方々ばかり。見習わねばなるまい、と小夜はひそかに誓つた。

彼は咲宮はなのみやに会つついでに、その妹である華宮の居室へと寄つたとのことだつた。

喧嘩ついでの間違いでしよう、とは華宮の言である。

「ああ、堅苦しい役職名ではなく、どうぞ」

「橘中將。わたくしの大事な女官に手を出さないでくださるかしら」

名前で呼んでももらいたい、と言おうとしたのだろう。その台詞を、華宮がぴしゃりと遮った。厳しい表情のまま、小夜に向かってささやく。

「この男、方々の女性にこんなことばかり言っているのよ。わたくし付きの女官が、これまでに何人泣かされてきたことか」

なれなれしく……もとい、気安く言葉をかけられて驚いていた小夜は、橘中将を見やる。整った顔立ちに、よく通る声。

確かに、弁舌は巧みでありそうだ。苦笑するだけで否定しない様子から、おそらく華宮の言うことは真実なのだろう。

「物慣れない女性に声をかけてさしあげるのは、男性として当然のたしなみですよ」

「声をかけるだけであれば、ね。大した用もないのに足繁く通うことは必要ないわ」

よからぬことを目前で暴露されても、当の橘中将はどこ吹く風。素早く言葉の応酬が交わされるが、ついていけない小夜はただ眺めるばかり。

「用ならありますよ。近々宴に現れる、噂の琴の名手にお会いする……という、大切な用事がね」

「嘘でも、そこはわたくしに会いに来たとおっしゃったらどうなの」

「それは失礼」

「……………近々？」

打てば響くような二人の会話。ずっと黙って聞いていたが、ふと橘中将の一言を聞きとがめて、小夜はつぶやいた。

しん、と場に沈黙が訪れる。しまった、口を挟んではいけないかったのか…と小夜が不安になっていると、二人の表情はみるみる変わった。

ばつの悪い顔をした橘中将。そして、眉をつりあげる華宮。上総に助けを求めたくとも、彼女は少し前に退出してしまって不在だっ

た。

沈黙の中、最初に動いたのは橘中将だった。

「さて、そろそろおいとましますよ。咲宮さまをお待たせしてもいけませんし、ね」

彼はそそくさと帰ろうとする。その様子に、華宮は声を荒げた。

「わたくしも聞いていないわ、近々宴があるなんて。しかも、そこで小夜が琴を弾くとは、どういうことなの」

小夜が宴に出席するとは、当然華宮も出席するということ。彼の口ぶりからすれば、それは既に決定事項のようである。それなのに、華宮でさえその事実を知らないのは、どういうことなのだろう。

小夜も言葉を添える。

「あの、わたしも気になります。お願いします、教えてくださいませませ」

何か大きな粗相があつては困りますから。駄目出しにそう付け加えると、むしろ彼の方がずっと困った顔をした。

情けなげに下がった眉と、細められた目には不思議と愛嬌があつて。その様を見て小夜は、これまでこの公達に心を奪われてきた女性たちは、こんな顔が見たくて我俣を言うんだらうか…などと場違いなことを考えてしまった。

「女性二人に問い詰められたら、答えずにはいられませんね。…：残念ながら、今はまだ詳しくお伝えすることができません。ただ、じきに正式なお話がお耳に届くでしょう。それだけは申し上げますよ」

またご機嫌伺いに参りますよ、と微笑んで橘中将は去った。小夜があっけにと取られてしまうような、あざやかな去り際であった。

何かが、動いていた。それだけはわかるのだ。

けれど一体何が起ころのだろう。それが知りたくてたまらなくて、そして少しだけ怖い気がした。

## 春の巻 漆

三月になった。(★1)

桜の葉の緑は陽射しとともに日々鮮やかさを増し、人々のまとう衣の色調も躑躅つづじや藤など、次の季節の色彩へと移り変わりはじめていた。

小夜が賑々にぎにぎしくも橘中将との体面を済ませてから、三日と経たぬある日のこと。華宮のもとへと、宴の知らせと招待を告げる文が届いた。

書状は、みずみずしい若葉を思わせる薄緑の和紙に、美しい筆跡てでしたためられていた。こんな大変に興味の良さそうなもの、一体どこから届くのだろう。小夜が疑問に思う横で、華宮が書状を読みながら眉間にしわを寄せた。小声で毒づく。

「……そりゃあ、ぼろを出したって全部は口走って帰れないはずだわ」

近々、とうっかりこぼしてしまった橘中将のことらしい。彼はそんなにも上位の方から口止めをされていたのだろうか？

「誰がこんな馬鹿らしいこと言い出したか知らないけれど、それに乗ってしまうおじいさまもおじいさまだわ」

ため息をもらす華宮は、宴の趣旨が気に入らない様子。なぜだろうと小夜は頭をめぐらせる。えーと。

華宮の生母は藤壺中宮。その父、つまり華宮の祖父と言つと……手紙の主は、太政大臣だろうか？

宴の場所は、宮中からも程近い、二条にある太政大臣邸。宴の趣旨はというと、「親王咲宮が東宮に選ばれることを祈願するためのもの」なのだそうだ。

「ええと……権門の華やかな方々は、どんなことでも宴に変えて楽しいことへと転じさせてしまわれるのですね」

そんな仕様もないことで宴を開くのか、とは流石に小夜も言うことができず、なんとかそれだけを言った。なにせ催し主は、自分が仕える華宮の祖父なのだから。

「小夜の選ぶ言葉にしては、耳あたりがひどくやわらかね」

「ええと、その……いえ、ご勘弁ください」

「冗談よ。わたくしでさえ、この宴を『馬鹿馬鹿しい』と切り捨てることなどできないわ」

苛立たしげに、扇を開いたり閉じたり。眉間を押さえてみたり、こめかみを押さえてみたり。華宮は大層おかんむりの様子だ。

しかし小夜にとってみれば、太政大臣はとても恩ある人物。政治での父の後ろ盾であり、なにより華宮へ仕えよと推挙して下さった方だ。その太政大臣が呼んで下さる以上、疎かにはできないし、むしろ喜んで琴の音を献上するべきなのだろう。

箏の琴を、練習しなくては。

心中焦る小夜をよそに、上総が華宮へ声をかけた。

「それより、宮さま。小夜の衣はいかがいたしますか？」

華々しく執り行われる宴であれば、皆美しく着飾って訪れるもの。しかし小夜にはそれに相応しい衣装がなく、また実家も頼れなかった。残念ながら父の趣味はイマイチである。義理の母の趣味は確かだが、本当に良い衣装を送ってくれる保障は全く無い。ぼろか、季節外れの流行遅れを宛がわれるのが関の山だろう。

そう思っていたところ、華宮が（実際には上総が）小夜の衣装を手配してくれるという。彼女が選んでくれるのならば間違いはないだろう。

「小夜には藤色が合うと思っていたのよ！ねえ上総、これに合う浅葱あさぎの単ひとえはないの？」

「浅葱では、少々おとなしすぎやしませんか？宴なのですから。いつそ生成りを通して萌黄に変えてはいかがでしょう」

「そうねえ。ただ、小夜は肌が白いから、緑のような濃い色合い

も似合うのよね。そう、そちらも羽織って見せて。……ねえ、小夜はどんな色がいいの？」

「……………宮さまに、お任せいたします」

自分が気後れしてしまうほど良い衣を用意してくださること（宴には良いだろう）、そして上機嫌に変わった華宮の着せ替え人形になることを耐え忍ぶことを除けば、小夜には願ってもないことであつた。

「宴に正式に招かれたのであれば、ご挨拶に伺った方がよろしいのでしょうか？」

ひとしきり小夜を着せ替えて満足した表情の華宮に、小夜は訪ねた。箏の琴を練習しなければ、と用意していたときのことである。

「そうねえ……………あら、そういえば、お兄様に会ったことはなかったのよね」

小夜が挨拶に回つたのは、華宮の母、藤壺中宮のみである。宴の主役である咲宮には、まだ会ったことがない。そしてこの不可思議な宴を催す、太政大臣にも。

「おじいさまはいいわ、きっと今頃、忙しそうにしているから。わたくしが行ってもほとんどお会いできないのだし。宴の席で顔合わせとする他ないでしょうね」

太政大臣ともなれば、政務に私事に忙しいのだろう。自由のままならぬ孫娘が会いに行っても、会うことが難しいだなんて。小夜には想像も付かない。

「それなら、宴の前に一度、お兄様のもとへ行きましょうか。小夜がどんな子か、気にしているようだったし。琴の音を聞かせて欲しい、とも言っていたわ」

「……………そんな大層な腕前ではないかもしれませんが、とお伝えください」

これは軽い練習で済まされる場合ではなさそうだ、と小夜は慌てて絃を整え始めた。

## 春の巻 漆（後書き）

\*1 2007年を例にとると、4月1日（およそ桜の咲く頃）は旧暦2月14日。旧暦3月1日は4月17日とのこと。桜の葉が本格的に芽吹いて益々暖かくなる、過ぎしやす季節を想定してください。

## 春の巻 捌

「やあ、そちらが華宮お気に入りの女官だね」

咲宮は、母方の身分も申し分なく、次の東宮と目されるほどに勢いのある親王である。けれど開口一番の台詞には居丈高な様子が無く、妹の華宮と同様に、どこか親しみやすさに似た愛嬌があった。そして、同母の兄妹であるだけに、顔立ちなどもよく似ている。

……顔立ち？

「は、華宮さまにお仕えさせて頂いております。小夜と申します」  
慌てて小夜は頭を下げた。

御簾。几帳きちようや屏風びよふう。扇子。いずれも、平安時代に貴人たちの顔を隠した家具や身の回りの品である。当時は身分が高いほど、顔を他者から隠す傾向が強かった。

しかし親王の表情を直接見ることができるとは、どういうことか。つまり、御簾や几帳などはさっぱりと取り払われていたのである。実の妹である華宮に対して、直接対面することはまだ、ないことではない。華宮に仕える小夜にも、咲宮は同じ扱いをしてくださったのだった。

おずおずと顔を上げて、小夜は兄妹を眺める。不躰にじろじろと見るものではないと頭では分かっているのだけれど、つい見とれずには居られなかった。

「おふたりは、目元がとてもよく似ていらつしやいますね」

同母の兄弟姉妹を持たない小夜には、似て当然の間柄が不思議に思えて仕方ない。半分の血のつながりでは、顔立ちが良く似ることも、全く異なることも、どちらもままあることだったからだ。

「ほんとうに？よく言われるよ。上総には昔から『御簾から覗く眼だけでは、どちらがどちらか分かりませぬ』なんて言われたものだしね」

朗らかな声で、咲宮は笑う。笑ったときの目の細め方もよく似ていた。同じ笑顔に常日頃接しているからだろうか、咲宮が笑うと華宮が微笑んだような心持ちがして、小夜の気持ちも明るくなる。

「あら、嫌だわ。お兄様はそれを狙って、悪戯の直後にわたくしをよく連れ出していたのでしょように」

つんとそっぽを向いて、華宮が扇子を広げる。ばれていたか、と咲宮の笑みはさらに深くなった。

「そうそう、実際に手伝ってもらったことも何度かあったね。小夜、聞いてくれるかい？この姫様は昔からお転婆だったから、揃いの水干すいかんを着せて兄弟にしたら、悪巧みが僕の仕業とは絶対にわからないと思っていたんだ」

帝の可愛がつている猫と、中宮の可愛がる子犬をこっそり入れ替えてしまったこと。

童子姿の妖怪を真似て、そこらの楽器をかき鳴らして遊んだこと。なぜか母中宮と上総には見破られて叱られ、それでも最後にはおかくして皆で笑ったこと。

賑やかに笑いながら、咲宮はそんな思い出話の数々を明かしてくれた。

「もう、お兄様だったら！わたくしの仕様もない過去をばらしてしまつたために、小夜を呼んだんですの？」

おや、今頃気づいたのかい？と、しれっと返す咲宮は、華宮とは仲の良い兄妹だったのだろう。小夜は可笑しくて頬が緩みっぱなしで、表情を引き締める筋肉がどこかへ行ってしまったとさえ考えた。

是非にと乞われ、小夜は琴の音を献上した。それをゆっくりと楽しんだ咲宮は、「お前はこんなに良い弾き手が仕えているというのに、練習もしないのかい？」と華宮を煽る。

「わたくしにだって、多少ならば弾けますッ」

むきになって琴柱と格闘する華宮をよそに、咲宮はこっそりと小夜にささやいた。

「僕ら兄妹の中で、いちばん心根が強いのが華宮だからね。その度胸を僕にも分けてもらいたいくらいだよ。でもたまに自信を失うと、びっくりするぐらい脆くなるのが玉に瑕きずでね、昔からの心配の種だった。良い話し相手ができて最近は安定しているらしい、と聞いてほっとしていたんだ。これから、妹のことを頼めるかい？」

何気なくささやく声だったが、眼差しは真剣なもので。同母の兄妹とは、かくも労わりあうものなのだろうか、小夜は感動を通り越して羨ましく思ったほどだった。

「とんでもない、私の方こそ、たくさんお世話になってばかりです。そんな私でよろしければ、今後とも是非、華宮さまのおそばに置いて頂きたく存じます」

深々と頭を下げると、小声で「ありがとう」というのが聞こえた。それが嬉しくて顔を上げると、何やら含みのありそうな笑みで咲宮は華宮へと話題を振った。

「そうだねえ、僕としてもそれが一番安泰だと思うよ。ねえ、華宮？」

一番、とは一体何と比べているのだろうか。小夜が不審に思っていると、箏を奏でるのを諦めた華宮が眉を吊り上げた。

「お兄様！」

「太政大臣の推挙で仕える娘は、とても良い子じゃないか。お前にはもつたいないよ。僕のところには欲しいくらいだ」

「橘中将と同じ反応をなさらないで。お母様と上総に言いつけますよ」

「おお、怖い。見ての通りの我儘姫様だけど、小夜、これからも宜しく頼むよ。でも手に負えなくなったら、いつでもここにおいで」

「駄目よ、小夜はわたくしのところに居るの。お兄様達になどあげないわ」

かしましく騒ぐ二人を眺めていると、真意の読めない眼差しで咲宮は言った。

「冗談でこんなことを言うものか。華宮が手放したからない程の

いい子なんだ、他にやるぐらいなら、僕のところをもらっていくさ」

妾腹とはいえ、小夜は納言家の娘。更衣として入内できる身分と家柄は、一応持っている。咲宮が東宮になり、やがて即位すれば、その発言力と権力は否応なしに増していく。小夜を更衣にと望まれれば、断るすべなどあるはずもない。

きつと、また会うことがありましよう

脳裏に、月夜の声がよみがえる。『また』とは、一体いつのことなのだ。このままでは、小夜は自由の利かない身分になりかねない。桐壺だか梨壺だかに閉じ込められて、都の中心で世俗に疎くなっていって。

世間知らずになるのを嫌と思うのは以前からだったけれど。この、奇妙に募る怒りのような気持ちは何だろう。

昼間と言わず、早朝でも夕暮れでも夜半でも構わない。さつさと会いに来たらどうなのだ、と人知れず小夜は毒づいた。

恨み言のひとつや二つ、呟くにも『名乗らずの公達』の名前を小夜は知らない。

それが妙に苛立たしかった。

彼の名を知りたいと、切に思った。

## 春の巻 捌（後書き）

いくつか平安用語をここで解説。

几帳：布張りのついたてのようなもの。

水干：貴族の少年の服装。

## 春の巻 玖

小倉百人一首に、次のような和歌が収められている。

『みかきもり 衛士えしの焚く火の 夜は燃え 昼は消えつつ ものをこそおもへ』

みかきもりとは御垣守、つまり宮廷の門を警護する者たちのことで、衛士もまた同様である。夜間の警護には衛士たちが火を焚いたが、これが漆黒の闇にひどく映えたことは想像に難くない。

現代人がイルミネーションを眺める感覚に似ているのであるうか。この「衛士達が門のそばで焚き続ける火」に、見とれる者は多かったと思われる。

眠れず、あるいはふと目覚めてしまった夜半に、御簾しとみや部しとみから門を眺めれば、何も見えない闇の中に、安堵をもたらず明かりが灯っている……というのは、雅を愛する平安の世において、大変に風流かつ心躍る光景であったのだろう。

門を守る火焚きは、和歌の題材だけでなく、心躍るような物語の舞台でもあった。

衛士は様々な地方から京へと集められる。武蔵国から来た一人の若者が、火の番をしながら故郷の歌を歌っていると、それを耳にした姫宮が大層興味を抱いた。やがて、自分を連れて行って欲しいと頼み込みむようになった。これに了承した若者は、姫宮と手に手を取り合い、東国の郷里へと下った。二人はいつしか恋仲となり、無事に武蔵国へと辿りついた。追っ手が遣わされるも、若者とともに生きたいという姫宮の意志は固く、ついには帝もお許しになったという。

「更級日記」にて語り継がれる、竹芝の伝説である。

その焚き火を背にして、小夜は目前の人影に驚くしかなかった。まばたくことさえ忘れて、その者の目を呆然と見つめた。

太政大臣邸にて催される、宴がやってきた。

まだ明るいうちから紙燭しそくに火が灯され、酒が酌み交わされて、あちこちで人々が笑いさざめく。流石は権門の一族が催す宴というべきだろうか。贅を尽くした内容に、集まる人の顔ぶれも華やかで、小夜はただ恐縮するばかりである。もつとも、いちどきに多くの人々の名前と顔（あるいは風体）を覚えきれはすもなく、「あの方は」と華宮に問うてばかりいた。

一方の華宮は実に慣れたもの。挨拶に来る者たちを適切にあしらいつつ、小夜を引き連れて祖父（太政大臣）への目通りを果たした。小夜にとれば太政大臣は大恩人であり、ここでもただ恐縮するしかなかったのは言うまでもない。

「権中納言が次女、小夜でございます。この度は素晴らしい宴にお招き頂きまして……」

舌を嚙まなかっただけ、まだだと思った。それぐらい、緊張していた。ここでとちつたら、自分はおるか父の首まで飛びかねない……！などとさえ考えていた。

答える太政大臣は好々爺といった風情、その笑顔にはどこことなく藤壺中宮や華宮、咲宮に通じる面影がある。

「ああ、堅苦しい挨拶は無用。まだ宴が始まって半時も経たぬのに、同じ台詞ばかりで聞き飽きてしまったよ。どうぞ、楽になさい」

「はあ……」

「そもそも、宴とはハレの場、楽しむべきもの。厳格に過ぎる礼儀作法は、このような場では少々野暮ではないかね？」

この台詞に、小夜の背後で挨拶の機会をうかがう者たちが呻くようなため息を漏らした。太政大臣派において、この宴に招かれることは出世に繋がる大きなチャンスである。どうにか懇意になるため、せめて名を覚えてもらうため、しっかりと挨拶を……と思っていた

者たちはさぞ多いことだろう。

なるほど、先程の太政大臣の台詞は小夜を気楽にさせるだけでなく、その背後に待つ者たちを牽制するものでもあったのか。簡潔な言葉なれど、実に含蓄の多い台詞であることか。

小夜はまず言葉通りの意味に同感であったが、その含蓄を感じ取り、改めて感心していた。一方の華宮はただ黙って苦笑するばかり。

当初は「咲宮が東宮に選ばれることを祈念する」ために宴を開くなんて馬鹿馬鹿しい、と思っていた。選ばれたことを祝う宴ならわかるけれど、まだ正式に決まったわけでもないのに、と。

けれど経緯がどうあれ、始まってしまえば楽しいのが宴というもの。建前の理由はお粗末であるが、太政大臣は切れ者であるようだから、何かしら目的があるのだろう。小夜のような小娘には計り知れない、政治向きの何かが。

宴に招かれるとわかったとき、「何か動いている」と感じることはできた。それが何か見極めたいと思ったが、叶わなかった。

流れを作るのは自分ではない。だから、ただ流されるままに赴くしか仕様がないのだろう、と小夜は思おうとした。

流されるままに、生きる。

その生き方は、北の方や義姉に疎まれ蔑まれて暮らすことを、ただ甘受していたあの頃と変わらない気がして、心のどこかが軋むような痛みを覚えた。

## 春の巻 拾

宴は和やかに続いていく。気づかぬうちに、春の宵は更けて。

「先ほどの琴をしかと聞かせてもらったが、いや実に素敵な

これ、同じ年頃の娘さんはこんなにも大人びているぞ。其処のおてんば姫宮も見習ってはいかかな」

「もう、おじいさまったら！」

前半は小夜に、後半は華宮に向けられた台詞である。軽いお説教のような口ぶりだが、目元には笑い皺が寄っている。華宮はほんとうに、あちこちで可愛がられ、大切に育てられてきたのだなあ、と少しだけ羨ましい気がした。と同時に、そんな方にお仕えすることを誇りに思う気持ちがあった。

「ははは、そうやって怒る間はまだまだ子供である証拠。君もそう思わないかね？君のことはよく聞いているが、仲睦まじい様を見て安心したよ。これでも大事な孫娘だ、これからよろしく頼む」  
楽しんでいくといいと笑顔で言い残して、太政大臣は瞬間に人ごみに消えた。地位が地位だ、受けるべき挨拶は山ほどあるのだろう。現に、去っていくと同時に周囲の人ごみも動いて、太政大臣の後を追ったほどだった。

(大山……っていうか、嵐が去った……)

笑顔の朗らかな人物だったが、野心や企てはその奥に巧妙に隠していられるようだった。存在感に飲まれないように気を張っていたら、気づかぬうちに消耗していたらしい。

ふう、とため息をつくると華宮が笑った。

「疲れたでしょう、お兄様へのご挨拶は明日にしましょうか。きつと今頃、おじいさまより長い行列を抱えてうんざりしているから」  
宴の主役である咲宮へ、挨拶に行く人数は太政大臣の比ではないだろう。声を掛けて頂くよう、何度でも並ぶ者だって居るはず。

「……そうですね」

ほつとして小夜は笑った。緊張が解けて、途端に眠気を感じる。現金なものだ。

宴であるからには、夜通し酒を飲み交わして騒ぐ者たちがいる。

酒に強くない者は、広間や縁側などで酔いつぶれて眠ることもある。太政大臣の計らいにより、華宮と小夜は屋敷の東側に休む部屋を宛がわれた。自宅や宮中以外に泊まることは、外出経験の乏しい小夜には初めての体験である。ひそかに心躍ることであつた。

一方の華宮は、母方の実家とあつて何度か訪れたことがあるといふ。

夜も更けて暗いため、部屋や調度をじっくりと眺めることはできない。それが残念だとこぼすと、「大したことはないわよ」とさらりと流されてしまった。きつと良いものを見慣れた華宮ならではの台詞だろう。太政大臣からの文はとても趣味の良いものであつたことを思い出して、明朝が楽しみになる。小夜のわくわくが減ることはなかつた。

華宮の身の回りの世話を果たし、自分に与えられた部屋へと戻る。釣殿や、屋敷の西の手がにわか騒がしくなる。衛士たちも酒を飲み交わし、楽しく騒いでいるのだろう、と思つていた。

バサツ。

何か御簾にぶつかつて、御簾が一度大きくはためいた。振り向きざまに見えたのは、月明かりの下ひるがえる人影がひとつ。何事だろうと端近に寄つて行くと、ぐいと腕を掴まれて何者かに引き寄せられた。

「！」

誰か、と叫ぼうとするが声にならない。その何者かが手で小夜の口をふさいだためだつた。ふさがれた口元まで恐怖心がこみ上げる。

必死にもがいても腕は手は離れなくて、力では到底かなわなくて。

一体誰なのだ、こんなことをするのは。かつて小夜に恋文をしたためた者達のひとりだろうか？小夜がその誘いをすべて断っていたのは、その気がないのもさることながら、恋の駆け引きなど全く経験がないためだった。

そう、これまでこんな風に誰か男の訪いを受けたことなんてなかった。良縁は全て義姉のもの。妾腹でも構わないという男は義母がはねのけた。下手に縁づいてしまうと後々面倒だから、というのが理由だろう。それ以前に、かつては父の出世が鳴かず飛ばずで、大した縁談そのものがやってこなかった。

だから、こんなことが起こるなんて危機感は全くなかった。

噂には耳にしたことがある。求愛の文に良い返事がないときに、居室に押し入り半ば力ずくで意中の女性を妻とする、無粋な男達もいるのだと。有名な物語では、その者は姿形が無骨なだけで、妻も子も大切に作る男だと後々になって知れた。（\*1）けれど現実がそんなに甘くないことは、小夜は自らの短い半生をして充分に解っている。

宮中では守られていた、と今更気づいて臍を噛んでも遅い。華宮に咲宮に良くして頂いて、太政大臣の権力に擁護されていた。それに加えて甘く甘えていただけの自分が嫌になる。せめて自分の身に降りかかることぐらい、自分で何とかしなければ……と思うのに、身体が動かない。

もがけばもがくほどに強い力で押さえつけられる。驚きと恐怖に、もう暴れる腕にも力が入らない。

一体、どうしたら。

怖い。誰か。

## 春の巻 拾（後書き）

\*1 これは源氏物語、玉蔓と髭黒大将の物語をモデルとしています。平安時代当時は残念ながらままあることと思われた為このような描写をしましたが、現代においては犯罪となることは言うまでもありません。身勝手な犯罪が少しでも減ることを微力ながら祈っております。

## 春の巻 拾巻

潮時だろう、と思った。

「もう疲れてしまったよ。夜も更けた、流石に眠らせてくれるかな」

疲れたのは事実。眠りたいというのは嘘。体のいい口実を盾に、のんびりと独りで飲み明かしたい気分だった。

十日の月は南天を越えて、屋敷の屋根の向こうへと隠れる頃合いだ。広く宴に適した二条の屋敷も、夜半をとくに過ぎた今となつては寝静まった人が増えて閑散としている。

彼 咲宮の周辺を除いては。

権勢を誇る太政大臣の屋敷で、「咲宮が東宮へ選ばれることを祈念する」為の宴が始められたのは数刻前。主役である咲宮は太政大臣と同様に、来客の対応に追われていた。

「夜更かしは老体に響いていかん。老いばれは早いうちに退散するよ」と慣れた様子で太政大臣が宴の間を去つたのは夜半前のこと。人あしらいも東宮や帝の役目のうち、とこの時間まで耐えてきたが、そろそろ限界だと咲宮は感じていた。

退散を告げると、眠気を耐えて残った者たちから不満の溜息が洩れた。

「いやはや、御若いのですからそう仰らずに。まだお目通りを願う者たちもこうして参じておりますし」

「うん、こんなにも多くの方にお集まり頂けるとは思っていないかった。本当に有難いことだけど、やはり緊張もするものだね」

食い下がる者に苦笑いを向ける。なかなか闊達で興味深い会話のできる者だとは思ったが、度を越した粘り強さは気遣いを伴わなければ無粋なしつこさとして映るだけだ。繰り返し告げられた名は適当に忘れるか、あるいは良い様に使わせて貰うことにしよう、と心

の内に誓う。

にこやかに腹黒いことを思つて、小さくため息がもれた。彼のにこやかさは父帝譲り、腹黒さは母中宮譲りだ。両方あつて非常に便利だと思つのはいつものこと。所詮東宮や帝たるもの、宮中に巢食う狐狸のごとき貴族達との化かし合いに負けぬには、腹黒さは必須事項である。

そう、にこやかに無害を装う咲宮とて、野心はあるのだ。遠からず先、帝として即位すること。お飾りでなく実権を持つこと。

野心のために譲れないこともあれば、野心のために諦めねばならぬものもある。野心ある我が身はむしろ好きだが、諦めるものを思えば切ない気にもなる。

(……たとえば、この腹黒さを知らず慕つてくれる人とか、ね) 東の対屋に思いを馳せて、彼は再びため息をつく。西の対屋が騒がしいことなど、放っておくに限るのだ。

怖い。

助けて誰か。助けて。

誰かつて、……誰がいる？ わからないけれど、誰か。助けて。

恐慌状態に陥る小夜の耳に、そのとき声が飛び込んだ。

「静かに。何もしない　ただ、匿つてほしいだけだ」

どこかで、聞いた声だった。浅く、微かにかすれた声。

静かで冷静な声に、小夜の心も落ち着いていく。もがくのをやめると、腕をつかむ力が緩んだ。その隙を見計らつて素早く抜け出すと、手近にあつた御簾をがばりと持ち上げる。

月明かり。それから、少し離れた背後から、みかきもりの炎が部屋の中を淡く照らした。

「……」

薄明かりにぼんやりと浮かぶのは、小夜だけがその顔を知る男。ぱたりと噂の絶えた、「名乗らずの公達」だった。

「……貴女か」

この邂逅に彼もまた驚いたのだろう。いつか見たのと同じ表情をしている。整った顔立ちも、驚いた表情になるとどこかあどけなく、て親しみがわくと思った。ぼんやりとそんなことを考えながら、ただ茫然とその顔を見つめた。

「なんだ、貴女だったのか。顔を見られて如何しようと思っ  
ていました」

彼の驚いた顔はやがて安らいで、優しい笑顔へと転じる。小夜は返す言葉もなくそれに見とれた。そう、この笑顔が見たかった。いつかの約束通り、明るい日の光の下で。こんなにも心許ない火明かりの下ではなく。

（だって、そうでないと他の女たちと一緒にになってしまうから）彼の、「名乗らずの公達」の顔を知るのは小夜だけ。その事実を嬉しいとは思うものの、それだけでは我慢できない気分がするのだ。ただ恋を楽しむことだけを望んだ他の女たちと、同じ様にはなりたくない。

ただの恋の相手になどなりたくない。

自分の胸の内に矜持を強く感じたそのとき、前栽（せんざい）（\*1）の方が騒がしくなった。松明の炎がちらちらと揺れている。衛士たちだろうか。そういえば彼は「匿ってほしい」と言っていた。

慌てて小夜は御簾を閉じる。ぐいと彼の腕を引いて部屋の奥へと移動し、そのまま息をひそめた。徐々に外の騒ぎが大きくなり、やがて男が呼ばわる声が出た。

「もし、どなたかいらつしゃいますか」

一際大きい声。きり、と眉根を引き絞り小夜は覚悟を据えた。ま  
まよ。

## 春の巻 拾貳

匿ってほしいと言った公達は、身じろぎひとつせず息を潜めた。御簾の外では衛士たちが返答を待っている。

もし、誰も居ないと見なされれば彼らは通り過ぎていくだろうか？ まさか。間違いなく部屋に踏み込まれる。衛士が一人なら文の使いの可能性も高いけれど、騒がしく現れたのは数人。おそらく公達を探しているのだろう。

「私が」

小声で伝えて御簾から顔を出す。ひよこりと現れたのが少女であったことに、男たちが軽んずる気配がした。負けてなるものか、と胸の内で声がする。

「何事で御座いましょう」

低く落ち着き払ったような声を出した。松明の揺れる夜闇にその声が響き渡る。男たちが一瞬沈黙し、ややして先ほどの声の男が話し出した。

「先ほど屋敷に曲者が侵入したらしいのです。宴の夜に曲者を許したとあつては、主様の名折れとなりかねぬ事態。中を検めさせていただきたく存じます」

「それはできませぬ」

静かに言い放つと、男たちがかすかに鼻白むのがわかった。それに怯えなくなる自分を叱咤する。

「ですが」

こんな時にいちばん頼りになるのは誰だろうか？小夜の知る限りでは、おそらくそれは上総だ。その上総が自分に乗り移ったと自己暗示をかけて、小夜は必死に虚勢を張った。

「たとえ曲者が屋敷に入ったとて、夫君や父君でない殿方に婦人の寝所を検めて頂くわけには参りません。まして、身分ある方の寝所であれば尚のこと」

(本当は、身分ある方の寢所とは隣のことなのだけ)

その高貴な女性に付き従う者へ与えられた部屋なのだから、言わば主の部屋も同然なのだ。と、思うことにしよう。

多くを語ることは、却って嘘を暴く種になることがある。だから、中で休むのが誰かなんて詳細は告げない。けれど多くの人が集まる宴の夜に、対屋に寢所を与えられるのは、ごくごく限られた者のみ。太政大臣と縁ある高貴な女性……となれば自ずとその正体は知れるもの。

衛士たちは、ここが誰の部屋か思い当たったようだった。ざわめきが少し小さくなる。困惑と諦めのような空気がかすかに漂う。しかし主格と思しき男は言いつのつた。

「身分ある方の寢所であるからこそ、危険がないか確かめるべきではありませんか？」

そう来ると思った。彼の言葉は確かに正論であり、また隙も少ない。権門の二条邸を守る衛士としては、大変に適任で信用できそうだと小夜にも思えた。しかし今はそう言っていられない。

「私の主様は宴でお疲れの様子で、今しがた御休みになられたばかり。眠りを妨げることはできかねます」

宮様、と言いそうなところをなんとかぼかして、小夜は反論する。「二条様の屋敷ならば安全とお考えのうえで、この奥でお休みなのです。二条様\*1とて、ご心配をおかけになるようなことは避けたいと、きつとお考えのことでしょう」

内親王という身分のため、華宮は宮中に閉じ込められた生活を続けている。そんな彼女に許される数少ない外出先が、この二条邸なのだ。そして様子を見ていれば、太政大臣が華宮を大切にしていることなどすぐにわかる。曲者の侵入があったことが知れ渡り、二条邸への外出が差し控えられる……といった事態など、華宮にとっても太政大臣にとっても避けたいことに違いない。

「何より、曲者は宴の客には秘密裏に捕えねばならぬ等。無用な騒ぎを招いては、二条様にとって良いことはありません」

都には娯楽に飢えた貴族たちが山ほど棲んでいる。ゴシップが政界追放を招いた例もまた、飽きるほど存在しているのだ。太政大臣が根も葉もない噂ごときで権力を落とすことはないだろうが、危険性は避けるに越したことはない。

「ですが……」

衛士の頭と思しき者は、いまだ釈然としない顔をしている。

部屋の奥に休む婦人だけでなく、太政大臣の立場も慮ることで、小夜たちが彼らの敵ではないと伝わればいい。ただそれだけでいいのだけれど、果たして目の前の衛士はそれで引き下がるだろうか？ どうにも、今ひとつ決め手に欠けるようで、それが小夜には歯がゆくてたまらない。部屋の搜索を頑迷に拒むほど、不審さが増すのもわかっているから尚更嫌になる。

暗闇で息を潜めた、あのとき。自分が何とかしなくては、と思ったのだ。もしも自分に何かできることがあるのなら、その何かを果たしたいと思ったのだ。

勢いに任せて飛び出したはいいけれど。

一体、どうしたらいい？

混迷を極める小夜の耳に、そのとき声がした。

「あの、すみません。西の対屋に、賊が」

## 春の巻 拾参

「早く。早くいらして下さいと、橘中將が」  
その台詞を言った男の風体は小夜にはわからなかった。というのは、男は松明を掲げる衛士たちの背後におり、夜半の闇に紛れていた為である。

しかし風采などこの際どうでもよかった。前栽の奥に膝をつき頭を垂れた男の、言葉こそが問題であった。

『西の対に、賊が』

一瞬にして衛士たちに動揺が走る。ざわざわと驚きさざめく彼らをよそに、衛士の頭は眉根にきりと皺を寄せるが冷静だった。

「急ぎ、西の対に向かえ。中將様のもとへ」

配下に指示を出すと、八割がこれに従った。中將からの使いらしき男に案内され、慌ただしくばたたと駆けて去った。

小夜も知る橘中將、彼は太政大臣に近い親族である。太政大臣、咲宮に次いで、この邸を束ねる権を持つ。だから、中將が衛士を呼び集めるのはいたく自然なことであった。

それは小夜にもわかるのだけれど。

(……何が、起こったの?)

しかし、これは一体どういうことだろうか？曲者とは、部屋の奥で息をひそめる公達のことではなかったか？間近にいる衛士の目を盗み、東の対にあるこの部屋から短時間で西の対に移動した……とは考えにくい。だからといって、こつも都合よく別の賊が現れたりするものだろうか？

訳がわからない。先ほどまで必死に張った虚勢などどこへやら、小夜は呆然とするしかなかった。

ひとしきり配下たちが去るのを見届けると、衛士の頭は小夜の方を向いた。

「どうやら、我々は思い違いをしていた様です。貴女にも、御休

みになられる御婦人にも、大変申し訳なく存じます」

そう言って、深々と頭を下げる。

「はあ……あ、いえ」

助かった、とほつとする余裕があればよかったが、一度気が抜けてしまうとそうもいかない。小夜はまごまごするしかなかった。鋭い目つきから一転したその様子を見て、衛士頭は少しだけ微笑んだ。「それでは、私はこれで。大変お騒がせ致しました。どうぞごゆるりと御休みくださいませ」

再度一礼をして、衛士の頭は残った配下を従え夜の闇に消えた。立ち尽くしてそれを見送った小夜は、なぜ笑われたのだろうとしばしぼうつとしていた。

「衛士たちは、行きましたか」

背後からそう声をかけられて、小夜は飛び上がった。まだ誰かいたのか　とひやりとして、振り返る。御簾の奥にいたはずの公達が、すぐ後ろにいた。

(び……………つくりした)

混乱に次ぐ驚きで、言葉が出てこない。そうです、とも言えず小夜はこくこくと首を縦に振った。

心臓に悪いことは、やめてほしいとちらりと思う。

そう、背後から囁く浅くかすれたその声も、小夜しか知りえない整ったその顔立ちも、手を伸ばせばすぐ触れられてしまいそうに近いその距離も、気がついてしまえばひどく心臓に悪い。

「衛士たちをやり過ぎます、と微笑まれても困る。助かりました。ありがとうございます、と微笑まれても困る。やはり心臓に悪くて……そして、小夜にできたのは時間稼ぎだけ。衛士たちを部屋に入れずに別の場所へ促すことはできなかった。運よく「西に賊が」と知らせが来て、結果それで助かってしまったのは小夜も同じ。」

「私には……なにもできていません」

ちよつと琴が人より得意で、ちよつと人より宮様に気に入られてそれだけでいい気になって調子に乗っていたのかもしれない。自分が誰かのために「何とかしなければ」と思っても、その時にそれが果たせなければ仕様がなない。

どんどん落ち込む小夜を浮上させたのは、密やかな笑い声だった。「とんでもない！ 貴女の時間稼ぎがなければ、衛士に踏み込まれていたことでしょう。こう見えて、私の顔は意外に割れているんですよ。もしそうであれば、宴の客だとかまかすことは難しかった」

「……都中の御婦人がたにはずっと、名無しの権兵衛を貫いている割に？」

「ええ、そうですよ」

「ひどい人」

厭味のような台詞をしれつと交わす表情を見て、小夜の顔にも微笑が戻ってきた。

しかし宴の客ではないとしたら、彼は一体何をしにこの二条邸にやってきたのだろうか？ あらためて彼をまじまじと眺めれば、比較的良い身なりをしている。まさか本当に賊というわけではあるまい。

「ああ、それは」

はぐらかされると思っていたが、尋ねたところあっさりと彼は答えた。

「咲宮さまに言祝ことばぎを差し上げたくてね。東宮とうきゆうになられることを祈念するなら、言祝ことばぎは多いほどいいはずなんだが、生憎太政大臣の覚えはいまいちだね」

それでわざわざ宴に忍び込んだというのか。小夜はあきれ返った。「それなら別の機会にきちんと言祝ことばぎを差し上げればよかったのに……。衛士に捕まっていたらどうするおつもりだったのですか？ 運よく別の賊が現れたから良かったものの」

「ああ、あれは口実だろうね」

「……………は？」

衛士を大勢動かしておいて、口実、つまり嘘だったなんて。なんということを経々しく口にするのだろうか、この人は。しかもそんな嘘について賊を逃がしたことになるれば、先ほどの男はただでは済まされないはずなのだが。

「ああ、心配するには及ばないよ。先ほどの男は私の乳兄弟で、これさだ惟定これさだという。西の対にいる知人に繋ぎを取ってもらっていたんだ。公昭ならたぶん事情は分かっているだろうから、適当に有耶無耶にして誤魔化しておいてくれるよ」

「ただこれだけ騒ぎになってしまつては、咲宮さまに言祝ぎを差し上げるどころかご挨拶さえ難しいね。仕方ない、日を改めるとしよう。そうひとりごちて、彼は苦笑した。

「……………そうですか」

では役に立つたのは結局、彼の乳兄弟と彼の知人ではないか。助けなければ、と意気込んだ自分が今更ながらに恥ずかしくて苛々する。声にかすかに滲んだ不機嫌を敏感にも嗅ぎ取ったのか、彼はもう一度微笑んだ。

「衛士を動かす口実があつたとして、衛士を引きとめる者がいなくては意味がありません。繋ぎを取るため惟定を遣つてしまつた後だったので、協力者は不在でしたが、どうしても時間稼ぎが必要だったのです。それを貴女が務めてくれた」

辛抱強く、ゆっくりと公達は繰り返す。小夜のお陰で助かったのだと、言い聞かせるように。

「私が失う立場など高が知れているけれど、それでもことが公になるのは恐ろしいと思う。本当に、感謝の言葉もありません。衛士が戻る前に私は退出しなければなりません、ここで逃げるだけの恩知らずではありたくない」

彼はここで一息つく。こんなお伺いを立てるのは奇妙なことだとは存じていますが、と前置きをして、呆然と聞いているだけの小夜をまっすぐに見つめた。

「何かお礼を差し上げたい。いつかの夜は部屋を間違ってしまったが、今度こそは貴女のもとに、伺ってもよろしいですか」  
まるで恋文のような台詞だと、頭のどこかがぼんやりと考えた。

春の巻 拾四（前書き）

梅雨が明けてしまいました。話中でまだ春なのが悔やまれます。  
ここから、加速していきます！  
どうぞよろしくおつきあいくださいませ。

## 春の巻 拾四

めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬまに  
雲隠れにし 夜半の月かな

考えたことが、ないわけではなかった。

たとえば、実母やその親戚たちが生きていて、義母や義姉からきちんと守られていたら。養われている妾腹、という負い目を一切持たずにただの「権中納言家の中君（\*1）」として暮らしていたら。今頃は、あちこちの公達からとどく恋文や縁談に、一喜一憂したりしていたのだろうか。一夜限りの幻のような恋も、老いて死ぬまで続いて欲しいと願う愛も、心から楽しむ気持ちがあったのだろうか。

けれど、現実はずう。

ないものねだりは時間の無駄だと、素直に思えるようになって久しい。たとえ良い縁談が望めなくても、華宮にそば近く仕える今、自分自身で身を立てる術をすべ小夜は手に入れたのだ。継母にいびられ続けるかつてと比べたら、格段に状況が良くなったのは明らかだ。降嫁あるいは斎宮に下る華宮に、一生付き従うのも良いとさえ思っていて、だから恋文などすべて遠ざけてきた。恋など一生しなくても構わないと思っていた。

その、はずなのに。

どうしてこんなにも、この一言を口にするのが辛いと思ってしまうのだろうか？

「いやです」

場を沈黙が満たした。

恋文とは、男が女のもとへ行き逢う許しを得るためのもの。当然その「逢う」には（一夜限りかもしれない）男女の契りの意味合いも含まれている。

逢いに行つてよいかと尋ねた、公達の言葉がその意味合いをもたないと、どうして言える？

ここで受け入れてしまったら、小夜は彼に弄ばれてきた数多の女たちと同列になってしまう。

それだけは、どうしても嫌なのだ。

「いや、です。だめです。だって　まだ、約束を果たして頂いていません」

思わぬ拒絶に言葉を失う彼に、小夜は言いつのつた。

「……………約束？」

「次は昼間にいらして下さると仰ったじゃないですか！」

たぶんそれを、どこかで心待ちにする自分がいた。「名乗らずの公達」の噂がぱたりと絶えて、どこかで捕まってしまったのか、あるいはどこかの女性と縁づいたのか、わからずにもやもやとした気持ちを抱えていたこともあった。思い出してしまうと苛立ちが再燃して、さらには目の前の公達が覚えている様子がなく、ついつい小夜は声を荒げてしまう。

ぼかんとしていた公達の表情が、みるみるうちに変化していく。ほっとしているような、どこか嬉しそうな、非常に困ったような、ひどく妙な表情に。

「ああ……………そうか、そうでした。困ったな、すみません、大変にお待たせしてしまったようで」

「……………」

待ちくたびれました、というべきか、別に待ってなんかいません、というべきか、小夜は本気で迷った。と同時に、「こういところ

だけ聴<sup>き</sup>くても困る」という理不尽な苛立ちに支配されてしまう。場を漂った不自然な沈黙を「非常に怒っている」とでも感じ取ったのだろうか、公達が少しだけ申し訳なさそうな表情になる。

「約束通り、次こそは昼間に伺わせて頂きます。それ以外にも、何か私が叶えられることがあれば、何でもおっしゃってください」

よほど慌てたのだろうか。何でも、だなんて大層な大風呂敷を広げるものだ。「私が叶えられることなら」なんて予防線を張るあたりが心憎い。「次は昼間に伺います」なんて言葉、社交辞令に過ぎない可能性をもちろん小夜はわかっている。だからこの怒りは子供の我儘か八つ当たりのようなもの。待ちくたびれた自分が少し恨めしいから、この場は有難く申し出に乗っけてしまおう。

先ほど衛士と対峙したときよりも、ずっと冷静でいると思える。怒りを感じた方が冷静になれるものだろうか？わからないけれど、何を言ったものかと小夜は必死に考える。

「そうですね。では、有難く」

軽く息を吐いて、眉間によっていたしわをほぐすよう努める。取りつく島もない、というわけではなさそうだと公達がほっとした顔になる。その表情を見ていたら、勝手に疑問が口からすべり出た。

「貴方のお名前を伺えますか？」

あなたは、誰？

シンプルに過ぎる疑問。けれどずっと気になっていた。まだ現れないの、うらめしいひと。心中でそんなことを考えても、その煩悶を向ける名前を知っていた女はいない。ならば、他ならぬ自分が名を知るたった一人でありたかった。

場をふたたびの沈黙が満ちた。満月がにわかにかに雲に覆われたせいで、彼の顔は判然としなかった。けれど、やがて聞こえるのは押し殺したような、嗚咽のような……笑い声、だった。

「……つくく、ほんとうに、貴女は手強いひとだ」  
答えねば、衛士を呼ばれるよりも恐ろしいことが待っていそうだと彼はひとりごちる。

「では、いずれ昼間に何うときに……と言っても、その様子では聞き入れてはくださるまい」

「もちろんです」

慥然と答える小夜の様子がお気に召したらしい。しばらく密やかな笑い声を漏らして、やがて彼は言った。

「確かにここまで助けられている身ですから、貴女には知っておいて頂きたい」

満月が雲間から現れ、春霞に淡くにじんだ光が二人を照らす。

静かな声が出た。さねのりさま、と小さくつぶやいて繰り返すと彼は目だけでうなずいた。再び視線が交わったその瞬間、一陣の風が二人の髪を衣を乱した。

春の巻 拾四（後書き）

\*1 この時代では長女を大君<sup>おおいきみ</sup>、次女を中君（なかのきみ、なかつきみ）と呼ぶ風習がありました。この呼称には母方の身分は意識されず、単純に「さんちの上のお嬢さん、二番目のお嬢さん」という感覚だったと考えています。ただし、あまりに身分が低すぎて序列に入っていない例はあったかもしれません。。。

春の巻 拾五

長い夜が明けた。宴に緊張していたのだろうか、随分深く眠っていた気がする。宴で箏の琴を奏でたことなど、はるか昔の出来事のようにだ。

そして夜更けに起きたことは夢だった気持ちさえする……図らずも、いつぞや感じたことと同じ感想を抱いてしまったのは小夜のせいではないだろう。

ただひとつ、ちがうことがあるとすれば。

<さねのり>と、申します

(……信じられない)

名を聞きたいなんて頼み、拒まれても当然と思っていた。強く拒むのならば諦めよう、と思っていた。相手はあの<名乗らずの公達>で、どの女性から乞われても決して名を明かすことなどなかったのだ。

その、顔と名の両方を知るただ一人に小夜はなった。以前よりも表情豊かなさまを見た。次こそは日中に現れて自分のもとを訪れるという。そう考えると、誇らしいや嬉しいを通り越して、なにやら叫びだしたいような気持ちになってくる。

今朝の自分は、変だ。いつもと違う、のはどうしたことだろう？目を覚ましたこの部屋は、ようやく慣れてきた宮中ではないからだろうか。二条の邸は、太政大臣のもつうちで最も広く調度なども美しいと聞く。華宮の住まう宮中がそれに劣ることはないだろうけれど、見慣れぬ部屋が浮ついた気持ちに拍車をかけている気もする。

(ああ、なんか、もう)

莫迦みたいに言葉が出てこない。

宮中に、帰りたくないと思え考えてしまった。

そんな自らの考えを、小夜は数刻もしないうちに猛省することになる。

「……………」  
「……………」  
ところかわって、宮中へ戻る牛車の中でのことである。

沈黙に堪えかねて、小夜は何度も口を開こうとした。が、華宮の優れぬ顔色に口をつぐんでしまう。いや、優れないのは顔色ではなく機嫌なのかもしれない。少なくとも、牛車に乗っている間沈黙を保つほどには、華宮の心情は良いものではない様子だった。あくまでも傍目には、宴に疲れてぼんやりと御簾の外を眺めているように見えるのだけれど。

それでも、その様子が四半時も続けばいくら小夜でもおかしいと思う。

（目を合わせないのは、はじめの兆候。口をきかないのも、そうだった）  
かつて継母や義姉からうけた仕打ちが、嘲笑いが脳裏をよぎる。

これまで華宮にとても良くしていただいて、ひとは急にこんな風に変わるものだろうか？そもそも、華宮に小夜に対する悪意があるなんて、そんなこと小夜は考えたくもないし華宮を疑いたくもなかった。

だと、したら？一体ご不興を買ったとしたら、それはいつ？

（……………まさか）

「あの！私なにか、大変な粗相をしてしまったのでしょうか」

宮中にたどりついて、牛車を降りるとき小夜はやっと尋ねることができた。そう、考えられるとしたら宴のことしかない。太政大臣は褒めて下さったが、琴の腕前など実は大したことなくて、大

変な恥をかかせてしまったのだろうか。宴で誰かと話す間、礼儀知らずな振る舞いをしてしまったのだろうか。それともあの夜、華宮の存在を楯にとったことで不興をかってしまったのだろうか。

尋ねてようやく、華宮は小夜と目を合わせた。ぷい、ときびすを返す。

「母さまに、ご挨拶に呼ばれているから」

(え……………っ)

どうしよう、という心がまず先立つ。こんなふう拒絶されてしまったのは初めてだった。背後で上総が盛大にため息をついたが、混乱の境地にいる小夜の耳には届かない。

立ちすくむ小夜に、見かねた上総が声をかけた。

「そうおどおどするでないよ。あの不機嫌は小夜のせいではないから、安心してお待ち」

「え……………でも」

「小夜が宮さまに対して失礼なことをしたわけでもないし、宴の琴も素晴らしかった。私はそう思うよ、それでいいじゃあないの。」

宮さまは時折あんな風に気まぐれを起こすけど、無駄に引きずったりはしないお方だしね」

それは、その通りだと小夜も思う。華宮はさっぱりとした性格をしていて、それが彼女のなよりの魅力だと内裏に来たときからずっと思っていた。でもあの不機嫌な様子が、単なる気まぐれと言われても小夜にはピンと来ない。

「だいたい、小夜が宮さまを信じて差し上げないと、悲しむのは他ならぬ宮さまでしょう。だから小夜はどんと構えて、宮さまを信じてお待ち」

どんと構えることなんてできそうにもなかったが、確かに小夜にできるのは、華宮を信じることだけ。不安顔で頷くと、誰よりも頼りになる女官は心得顔で頷き返し、颯爽と華宮の後を追った。

春の巻 拾六（前書き）

執筆当初はここで閑話が入る予定でしたが、時系列がなんだかおかしいので後回しします。  
今回は華宮視点。

## 春の巻 拾六

藤壺に程近い控えの間に、華宮は通された。母である藤壺中宮は、来客の為人払いをしているという。娘でさえ遠慮無しに立ち入れる訳ではないのは昔からで、最早それが哀しいと思う心もない。そもそも、小夜を振り切るようにやってきてしまったので、待ち時間が生じるのはやむをえなかった。ただ、沈黙を貫く自分が少し退屈だった。

所在なく待つっていると、ゆつたりとした足取りで控えの間に上総がやってくる。渋い顔をしていた。

「宮さま、少々おいたが過ぎませんか」

「……」

言われるだろうな、とは思っていた。それを素直に認めたくなくて、華宮は明後日を向き口を尖らせる。

「お忘れですか。小夜はもともとこの宮中で抛り所を持たぬ身。

宮さまにそっぽを向かれては、あの者はほんとうに宮中での行き場を失うのですよ」

「行き場なら、あるじゃないの。小夜が望むなら、さっさと行っ

てしまえばよいのだわ」

「宮さま」

咎めるような上総の一言に、はたと華宮は己を恥じた。売り言葉に買い言葉とは言つものの、望んでも居ないようなことを口走れば、それは真事となって己に返ってくるのが世の常だ。ひとはそれを言霊と呼ぶ。

言ってしまった、とおそろおそろ上総を振り返ると、目を合わせれば彼女は呆れたように嘆息した。華宮に反省の色を読み取ったようだった。

彼女はもともと、母中宮に使える女官だった。受領階級の夫がい

だが、夭折したそうだ。後添えにという縁談もいくつかあったと聞くが、全て断り中宮の傍を離れなかったという。

子供のない上総には、華宮も、咲宮も、よく叱られた。それこそ、母中宮以上に。躰けの親と言っても過言ではない。それが煙たいこともしばしばだったが、同時に愛情も感じていた。

「わたくしは宮さまの目指すことに異議を唱えるつもりはございません。ご自分のことを良くお分かりになったうえで考え、結論を出されたことなので。だからこそ、一時の短慮でふいにしてはなりません」

ほんとうに上総はよく支えてくれたと思う。政治向きのことに関わるのは祖父や叔父たちで、今上のただひとりの姫宮といえど進む道は思うままにならない。ならない中でせいっぱいのことをしようという華宮を、上総は黙って導いてくれていた。

「……………わかつているわ。ちょっと、八つ当たり」  
あの場に、自分だって立ち会いたかった。あのひとの姿を見られたかかもしれない機会など、いつぶりだっただろう。声を聞けただけでも幸せであるはずなのに、姿を見たいなんて、自分はとんだ欲張りだ。

尤も、その思いを遂げるためにいま、自分はあれこれと頑張っているところなのだけれど。だからといって、小夜に八つ当たりして良いはずがない。あのとき、見たことも無いくらい青ざめた顔色をしていた。見ているこちらの心が苦しくなるほどに。

「戻ったら、謝るわ」

よろしゅうございます、と頷く上総はいつもの仏頂面。けれど、少しだけほっとしたような雰囲気があった。酷いことを言ったなら謝る。喧嘩をしたなら、仲直りする。それはきつと当たり前のことなのだろうけど、その「当たり前」をできる相手などこれまでいなかった。だから、きつと自分は小夜存在に感謝するべきなのだろう。

藤壺の間へと通される道すがら、華宮は上総に問うた。

「ねえ、上総は母さまと喧嘩つてしたの？」

「そりゃあ、しましたよ。回数なんてもう覚えてもいませんね」  
賑やかしく話をしながら藤壺に通される。通してくれる女官もみな母の配下だから、にこにこしながら話を聞いている。

「ただいま戻りました、母さま」

いつものように御簾をかきわけて中に入ると、母中宮が厳しい顔をして座っていた。

華宮だけでなく、背後で上総までもが驚いて立ち止まった気配がする。呆然とする一方で、ああ、先ほどの小夜はきつとこんな心持ちだったのだ、ほんとうに申し訳ないことをしたなあ、と頭のどこかで華宮は考えた。

## 春の巻 拾七

どうしよう。

ただその一言だけが、脳裏をめぐりつづけていた。

厳しい顔をしていた母は、華宮と上総の姿を見とめると、少しだけ相好を崩した。

「良く戻りました。宴は如何でした？お祖父さまとは話せて？」

一見にこやかなその様子に、華宮はかえって身構えてしまったのを覚えている。

「え……ああ、はい。素晴らしい宴で、皆喜んでいました。小夜の琴も素敵で、お祖父さまもお元気そうで」

「そう、それは良かったわ」

「はい。……あの、お母さま。何か、ありました？」

微笑む母中宮はどこか複雑そうで。はしたないとは思いつつも、話の水を向けられる前に華宮はつい問うてしまった。どのみち華宮が問わなくても、母中宮のただならぬ様子を同席する上総がそのままに置くわけがない。

母はしばし逡巡したが、上総と目配せを交わし、やがて華宮に向き直った。

「ええ。良い報せと、悪い報せがあります」

母は、ふたたび表情を厳しく引き締めた。淡々と語りだす。

「まずは、良きことから。 咲宮が、東宮になることが決まりました」

咲宮が、次代今上である東宮の位につく。それは、華宮や母中宮をふくめた太政大臣一門の悲願であり、ひどく喜ばしいこと。「祈念するための宴」と言いながら、実のところ内々には決まっていたのだろうか。だとしたら呆れる気も少しあるが、他でもない兄が、東宮に就くことを望んでいたと華宮は知っている。これまでの祖父、

母、兄の苦勞が報われたとなれば、華宮にとつてもそれは嬉しいこと  
との筈だ。

「まあまあ、おめでとうございます。正式な立宮はいつ頃で  
すか？」

「まだ本決まりではないけれど、新年の除目の頃を予定している  
そうよ」

「それは今から忙しくなりますねえ」

基本的に表情に乏しい上総だが、珍しく微笑んで寿ぎを述べる。

その笑顔に、母中宮の硬い表情も少し綻んだ。けれど、華宮には素  
直に喜べない。

そんなに喜ばしいことなら、どうして母の表情はこんなにも硬い  
？母は基本的に強かで、だからこそいつもにこやかに振舞ってみせ  
ていた。華宮と上総、気の置けない人物のみの場とはいえ、こんな  
に厳しい表情をする母を、少なくとも華宮は知らない。

「……………」

喜ぶそぶりも見せられず、ただ母を見据える華宮を見て、母はち  
いさくため息をついた。

「それから、良くない報せですが」

どうしよう。

騒々しく足音を立てて駆けるなんて、年端も行かぬ子供のするこ  
とで、ひどくはしたないと分かつている。きつと後で上総に注意さ  
れるのだろう。それでも、華宮は大急ぎで来た道を駆け戻った。幾  
重にも重ねた衣服が足にまとわりついて、ひどく不快だった。

衣服に用いられる布地の多さ長さは、そのまま財力を示す指標に  
なる。華宮は今上のただひとりの姫宮で、しかも母方の後ろ盾は権  
門の太政大臣。当然彼女の衣服は常日頃からふんだんに布地を使っ  
たもので、それを蹴散らすような足捌きでなければ走れない。脚に  
腕にまとわりつく衣服が、これまでの、そしてこれからの自分を阻  
む様々なしがらみを想起させて、尚のこと華宮を苛立たせた。

その苛立ちを振り払うように、ただ、駆けた。いてもたってもいられなかった。

(頑張つて、頑張つて。やっと、ここまで来たというのに)

母を、何より上総を、説得するのはなまなかのことではなかった。それでも望みを諦めきれず耐えて、堪えて、ようやく上総に認められるところまで辿り着いたのに。

「このことについて、我侭は許しません」

母中宮ははつきりと言った。それは厳しい声色だった。太政大臣家の勢力の要としての命令であり、華宮に逆らうすべはなく、そもそも命令が正当なものであると華宮にだって判る。それでも、己の道を変えようと頑張つてきた華宮にとって、その内容は受け入れがたいものだった。

(上総は、母さまの味方)

言わば躰けの母として、これまで上総は華宮を育て慈しんできた。表立っては動けない母中宮の代わりに、陰日向なく華宮の味方となり支えてきてくれた。大層心強い味方として。

けれどそれは、上総が母に仕える者だからであり、また母が上総に絶大な信を寄せることに起因する。

(母さまは、独りじゃない。……わたし、は)

絶対的な味方が、ほしいと思った。

たとえ誰と利害が対立することがあっても、何をおいても、自分を認め支えてくれる味方が。自分が、心から信を置ける味方が、ほしいと思った。

(そんなの)

そんなもの、考えられる相手はひとりしかない。今更彼女以外に託す気も起こらない。

(……………さ、よ)

己の子供じみた振る舞いと、彼女をきつと傷つけてしまった今更の罪悪感と。それでも彼女を味方として切望する気持ちと、罰のよ

うに降ってきた母の厳しい言葉に、泣きそつだと思った。

春の巻 拾七（後書き）

華宮視点はまだつづきます。

## 春の巻 拾八

気難しい姫宮だと、陰口を叩かれるところに居合わせたことがあった。

物心がついた頃だろうか。時期も相手の顔も、もう覚えていない。

「貴女、あっちへ行つて。わたしは、宮さまと二人で遊ぶの」

どこの娘だったのだろう。あるとき、貴族の娘が上総に向かつてこう言い放った。

太政大臣に取り入る者たちの娘が、入れ替わり立ちかわり華宮に引き合わされたことがあった。母のいる藤壺を出て、別の場所に自室を得たばかりのころで、良い女官候補を探す只中にあつた。頼れるのは母が遣わした上総だけ。その母と上総の仲に憧れるものの、果たして望むような娘は現れなかった。

「宮さま、今日は何をいたしましたしょう？先日私の父さまが」

おそらく生家では我侂放題に育てられた娘ばかりだったのだろう。父の自慢、見え透いた媚、なにより、上総を「所詮はしがない身分の従者」として軽んじ、遠ざけようとする姿がひどく気に障ったことを覚えている。

「帰つてちょうだい。あなたと居る気はないわ」

当時の華宮は良い物言いを知らなかった。頑なに娘達を遠ざけ、母を祖父を上総を心配させ、いつしか気難しい姫宮と思われた。長じるにつれて表面を取り繕うことはできるようになったが、そのたびに心のどこかが《かつ》餓えるのを感じた。

「お兄様の所へ遊びにいらしたのなら、わざわざ私のところへ寄つていただかなくても結構です！」

幼馴染である橘中将と、軽い仲違いをしたのもこの頃だった。

兄弟は仲良くすべしとの祖父の方針から、華宮は咲宮と分け隔て

なく愛情を受け育てられた。実際、母を同じくする兄弟のなかでも、かなり仲の良い方だったと思う。後に小夜と義姉の不仲を聞いて、己は幸せな子供時代を過ごしたのだと痛感するほどである。

その仲の良い兄にさえ、橘中将という竹馬の友が居た。それが羨ましくて妬ましくて、橘中将に言いがかりをつけた。自分を案じて顔を見せてくれたのを、卑屈になつて遠ざけようとした。それを諫めてくれたひとが居て、別に気になりませんよと笑い飛ばしたひとが居て。この出来事が自分を少し変えたと思つているから、苦いけれど大切な思い出なのかもしれない。

それ以来、兄とも橘中将ともそれなりに良好な関係でいる。妬ましい気持ちがあつても、うまく隠して気にしないことを覚えた。

母の局を訪れば、表情に乏しい上総までもが笑顔になつた。他の妃だけでなく、時には政敵となる殿上人たちとも強かに渡り合う母中宮が、上総を見て安らいだ表情を見せた。その様を、何度も眺めては憧れて羨んだ。羨むだけでは道は開けないと知っていたが、ずっと為す術がなかった。

こちらの娘を女官として所望するならば、あちらの娘も重用しなければ均衡が取れない。身分が高いということは、それだけ人間関係で雁字搦めに縛られるということである。立場として申し分ないとしても、うまが合わなければ信に至るはずもなく。華宮の周囲は、母中宮のもとから連れてきた年かさの女官ばかりだった。

高望みだとは思つていた。けれど、妥協するつもりはなかった。どの道を選ぼうと、今後華宮がこの窮屈な都でしっかりと生きていく為には、信の置ける従者が必要なのだと子供心にずつと思つてきたから。

それだけ必要としていた存在が、思わぬ紹介から手に入った。渡りに船だと思つた。

唯一無二の友であり従者である者。世間知らずで自信に欠ける

が、大事なことに自立心があった。何より優れた女官として在ろうという意識があり、また上総を尊敬していた。不思議と気性が合つて、嬉しくて仕方なかった。口止めさえなければ、早くから全部打ち明けて、もつと心の底から信頼できる仲になろうと思つのに。尚のこと、手放したくはなかった。望みも小夜も、どちらも選べないなどと言っている場合ではないはず。

(罰でも当たつたのかしら)

我侭は許さない、と母は言った。違える気はないが、黙つてやり過ぎるのは苦しい。誰かに相談して和らげたいけれど、果たして、誰に？迂闊にも吹聴されてしまえば、自分以上にあの人が終わる。相談相手など、口止めをされても小夜しかないのだ！

ああ、どうしてこんなときに限つて、くだらないことで八つ当たりなどしたのだろう。上総に諫められるまでもなく、小一時間前の自分を呪いたい。小夜は言葉では厳しくとも、根は優しい子だから、きっと赦してくれるのだろう。けれど、それだけで良しとするかどうかは、自分の矜持の問題。

見慣れた舘戸しんみどが見えてきた。小夜が帰りを待つはずの部屋は、もうすぐだ。騒々しく駆ける足音を聞いて、きつと驚くのだろう。そして先ほどのことなど最初からなかったかのように、急ぎ現れた自分を心配してくれるのだろう。

小夜の優しい気持ちに報いるには。それから、母と上総のような関係に、互いに信を置ける仲になるには。

(全部、打ち明けよう)

口止めなどこの際知るものか。そもそも、このことを先んじて報せてくれなかったあちらが悪い。

小夜がこの内裏に呼ばれた理由。自分が小夜を欲する理由。些細な八つ当たりの原因も、なにもかも。きつと、それしかないのだろう。

春の巻 拾八（後書き）

次から、ようやく小夜視点に戻ります。

春の巻 拾九（前書き）

小夜は心配性。

## 春の巻 拾九

いつもの与えられた部屋で、そのとき小夜はぼんやりと座り込んでいた。

(……どんと構える、といつても)

そもそもどうしたら良いかわからない。そして女官として年少の小夜には、主不在では何もすることがない。できることがない、と言った方が正しいかもしれない。華宮の話し相手の立場に甘えず、もつと常日頃から上総の作業を手伝っていればよかった。手伝うだけではなく、自分で考えてなにか作業に当たればよかった。

(構えるって、何だろう)

構えておれと言った、その上総はいつも悠然としている。下手をすれば、政略に長けた殿上人たち以上に。それは彼女自身がもつ揺るぎない自信に由来するものだと、小夜も気づいていた。

(自信って、なに)

義母に義姉に蔑まれてずっと暮らしてきた小夜に、そんなものなどあろうはずがない。けれど上総のようになりたければ、頼りがいのある女官として華宮にお仕えするには、自分でそれを養っていないといけないはず。その道のりを思うと気が遠くなりそうだ。

(でも、自信が無くても、できることがある)

たとえば、昨夜のように。

たとえ上総の真似であれ、自分より年上の。しかも物々しい空気をもち衛士たちに対して堂々と振舞えた。思い返すたび、己のことなのに驚きを禁じえない。強く「自分で何とかしなければ」と思い行動すること、そしてそれが(一応は)果たせたこと。どちらも小夜にとっては初めての経験だったけれど、それが今は自分の胸のうちで明かりが灯ったように、あたたかく、そして不思議な心強さを感じていた。

ひとまずは、上総の真似でもいいと思う。いつかは全て自分で考

えて自分で行動できるように。寄せられる気持ちに、卑屈にならなくて済むように。

(宮さまと、話をしよう)

何が気に障ったのか、自分の何が至らなかったのか。きちんと聞きだして、落ち度があれば謝って。まずは、それからだ。

遠くからどんと音がする。昨夜聞いた衛士たちの荒々しい足音に似た……いや、それにしても足取りが少なく(おそらく一人なのだろう)、それに足取りも軽いような気がする。それに、今聞こえる足音は地面ではなく板敷きものだ。たくさんの人が住まう内裏で、軽い騒ぎは日常茶飯事。そのわりに、普段よりも足音も聞こえ話し声も近い。

(?!)

いや、近づいている。ばたばたと騒々しい駆け足の音が、華宮を待つこの部屋に向かって。何かと戸口に向かって居住まいを正したとき、激しい音を立てて蔀戸が開かれ、鮮やかな布地の塊が小夜へとぶつかってきた。

「小夜！」

布地の塊と思ったのは人。それもこの部屋の主で、小夜の首根つこにぎゅうとしがみついてくる。ぶつかられた勢いで後ろに倒れそうなのを、なんとか堪えて我に返る。ふわりと、やわらかい匂いがした。

「……み、宮さま?!」

覚えている限り彼女がこのように飛びついてくることも、それ以前にこれほど急ぎ慌てることもなくて(もちろんこのようなことが起これば「何ですかはしたない」と目を吊り上げる上総が普段そばにいることも影響しているだろう)、何事だろうかと小夜は身構えてしまう。

「ど、どうしたんですか？」

たしか彼女は生母である中宮に呼ばれて藤壺に行ったはずで、だとしたら中宮に何かあったのだろうか。華宮や咲宮の母であり、上総がかつて仕えていた主である女性。上総が戻ってこないことを思えば、その推測の真実味はいや増すばかりだ。

それとも、と別の考えが頭をよぎる。

問題が起きたのは藤壺中宮ではなく、ほかならぬ華宮の身にはないのか。だからこそ、太政大臣邸から戻り次第すぐに、という触れ込みで呼ばれていったのではないのか。

「宮さま……？」

それなのに彼女は、泣きだしそうな表情で、真剣な目で、予想もつかないことを話し出すのだ。

「きいて、ほしいことがあるの」

春の巻 拾九（後書き）

短めですが、きりがいいので一旦切ります。

そもそものはじまりは兄だった。

「年頃の近い女官が欲しくはないか」

珍しいこともあるものだ、と華宮は目を丸くした。

兄が彼女の居室を訪れることも、こうして提案と言う名の相談事を持ちかけられることも。そもそも話、人払いを面倒がつて上総の留守を狙うあたりからして怪しい気が漠然としていた。それでも、何の冗談を云うの、と流さなかつたのは単純に興味がわいたからだ。女官と言う名の腹心を持つことについては、これまで祖父に、母中宮に、橋中将に、何度となく話の水を向けられてきた。結構です、わたくし、もうあきらめておりますの。ときっぱり断るのがいつもの華宮だったが、驚きのあまり兄の言う「心当たり」がどのようなものか興味があつた。

「身分から言えば今まで呼んだ娘たちよりは低くなるかもしれないが。わりあいはっきりと物を言う、気丈な娘のようだよ。気が合いそうだと思うって」

気が合いそう、はっきりと物を言う。自分の好むフレーズに心が揺らぎそうだ。しかしこんな相談を持ちかける兄の真意はいつたどこにあるのだろうか。

思い当たるのは、普段の兄の所業。何かしらの交渉事の餌として、「華宮に仕える女官」という役職を宛がうつもりなのだろうか。

だとしたら、随分と大きな対価を求めるともりのようだ。

「わたくし、犯罪の片棒をかつぐのは趣味ではありませんのよ」

「おいおい、犯罪とか決めつけるなよ」

怪しげなおいがする、と華宮は話題を打ち切ろうとしたが、続けられた兄の言葉に息を飲むことになる。

「状況によっては、あいつをお前にやってもいい」

「……」

よくよく、この兄は交渉というものに長けていると思う。自分が望んでも得られないものをさりと提示されると、まるで手のひらの上で転がされているように思えてひどく悔しくなる。それと同時に「そこまでして？」という驚きを禁じ得ない。兄の云う「あいつは、兄にとつても余人に代えがたい者であるからだ。」

「……………本気ですの？」

「わからない。ただ 想像を裏切ってくれる期待はある。もちろん、悪くない方向に」

興味がわいた。身内以外の相手に対して非常に素行の悪かつたはずの兄、その彼が「だれか」を選び女官の地位を与えるべく自分に頼みごとをするという。その心情を問い質したくなった。

なにより、対価として示されたものは破格だった。ならば、自分にとるべき行動はひとつだ。

「一言はございませぬわね？」

真剣に兄を見据えて問うと、取引成立だな、と行って彼は見たこともない顔で笑った。

「そうして、呼ばれたのが貴方。あの娘は嫌、この娘はいや…と行ってばかりきたから、おじい様には気持ち悪くなるぐらい喜ばれたわね」

「そんなことがあつたんですか……………」

さすがは孫馬鹿である。

それにしても、と小夜はふと疑問を覚えた。

小夜と咲宮は、宴の前に引き合わされたのが初対面である。にもかかわらず、話の中で相手は小夜のことを知っているような口ぶりだった。

この時代、身分ある者はそれが高いほど顔を身内以外の他者から隠す傾向にある。女官などの役割を持たない貴族の娘たちも同様に

顔を隠し部屋の内に籠り、御簾の外に出るなどはしたくないこととされた。珍しい外出の際や大風で御簾がひるがえる折に、たまさか姿や顔があらわになる程度。そのたまさかを誰か公達が堀の割れ目や垣根の間から垣間見る、というのが一目惚れやヘッドハンティングのチャンスと言えた。もちろん小夜も妾腹とはいえ貴族の娘。内裏に上がる前、権中納言家の屋敷に居る間であれば、小夜の姿や言動を垣根などから見初めた可能性はある。だが、それは都を気候にそぞろ歩ける貴族に限られ、なにかと制約の多い東宮候補の咲宮には少し難しい。しかも、垣根などから垣間見た程度にしては、性格までよく観察されている気がする。

「それにしても、咲宮さまは一体どこでわたしをお見掛けになっただけでしょう」

ぼつりと疑問を口にする、華宮はぽかんと口を開けた。しばし呆然とし、ややして表情を引き締めた。

「……そうよね。知らなければそっちの発想をするわよね。当然よね」

「宮さま？」

「違うの、その兄じゃないの。咲宮ではない、もうひとりの兄」  
母違いの兄だから、交流があるというとよく驚かれる。それも、二人の母の実家は言うなれば政敵同士だ。けれど、「兄弟は仲よくすべし」という祖父の主義主張もあってか、幼いころから行き来があった。

「刑部卿宮さまの甥で、何年か前に亡くなられた麗景殿女御の  
子息、朔宮実朔君」

(さねのりさま)

その名前を聞いた途端、小夜の脳裏を数度の邂逅の光景がめまぐるしく過っていった。

春の巻 式拾（後書き）

ようやく、事態が繋がってきました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9546r/>

---

四季恋草紙

2011年9月4日10時36分発行